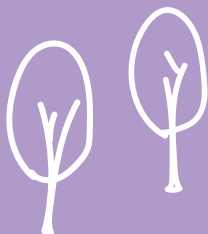


第7回 久留島武彦童話賞

子ども創作童話コンクール
受賞作品集



第7回

久留島武彦童話賞

子ども創作童話コンクール

受賞作品集

もくじ

▽ごあいさつ	▽玖珠町長 宿利政和	4
--------	------------	---

▽玖珠町教育委員会 教育長 梶原敏明	6
--------------------	---

▽久留島武彦記念館 館長 金成妍	8
------------------	---

▽有限会社 花書院 絵本専門士 柴田香	10
---------------------	----

小学生の部



大賞	▽しゃべる!?みかんの皮 久野夏葵	22
----	-------------------	----



佳作	▽こまつたきゆうしよく 若狭早	27
----	-----------------	----

選考委員特別賞	▽ことり 畑美怜	32
---------	----------	----

中学生の部

読売新聞社賞 ▽ 太ったミミズ！ 中島美咲 なかしま みさき 35



大賞 ▽ 月が輝くその地でもう一度 清水市夏 しみず いちか 44



佳作 ▽ 雨粒の願い 後藤里菜 ごとう りな 50

選考委員特別賞 ▽ いつか会う貴方へ 株本海環子 かぶもと みわこ 54

選考委員特別賞 ▽ 輝く希望を夢見て 吉松莉乃愛 よしまつ りのあ 65

久留島武彦記念館館長特別賞 ▽ 化け狐のきつちゃん 橘高茜音 きったか あかね 75

読売新聞社賞 ▽ めぐり逢いは再び 平川里彩 ひらかわ りさ 82

高校生の部



大賞

▽ 桜の木と青い宝石

穴井 汐莉

..... 98



佳作

▽ 自分のたのしみ、他人のしあわせ

松浦 奈央

..... 104

選考委員特別賞

▽ わがままな王と幸せの花 佐々木 咲和

..... 109

久留島武彦記念館館長特別賞

▽ 私を認めてくれる一人のへび 馬越 友梨

..... 113

読売新聞社賞

▽ にんじんを求めて 藤原 鷺馬

..... 117

【ごあいさつ】

「第7回久留島武彦童話賞」子ども創作童話コンクール」によせて

玖珠町長 宿利 政和
しゅくり まさかず

第7回久留島武彦童話賞」子ども創作童話コンクール」の受賞者の皆様、そして、ご家族、学校関係者の皆様に心からお祝いを申し上げます。

さて、このコンクールは日本のアンデルセン・久留島武彦先生の生誕145周年を記念し、また、児童文学の一層の発展を願って創設したものであります。第7回目を迎える今回は、小学生の部9編、中学生の部48編、高校生の部124編の合計181編の作品が寄せられました。受賞された作品はもちろんのこと、いずれの作品も独創的で感受性に富んだ、すばらしい作品の数々でした。

久留島先生は「子どもが育たなければ日本の未来はない」と考え、童話を通して子どもたちに「人間としてどう生きていくべきか」を伝えるため、その生涯を児童教育に捧げました。玖珠町ではその考えを引き継いで「童話の里」づくりに取り組んでいます。それは、「信じ合い 助け合い 互いに違いを認め合い」共に生きていく

まちをつくることです。このコンクールに応募してくれた子どもたちの中から、将来の「久留島武彦」が生まれることを、心から期待しております。

おすびに、選考にあたりご尽力いただいた選考委員をはじめ、多忙な中、応募を取りまとめていただいた学校関係者の皆様、当コンクールにご協力いただいた全ての関係者に厚くお礼申し上げます。

【ごあいさつ】

「第7回久留島武彦童話賞」子ども創作童話コンクール」によせて

玖珠町教育委員会 教育長

梶原 敏明
かじわら としあき

「第7回久留島武彦童話賞」子ども創作童話コンクール」において受賞された皆様、そして、御家族の方々、このたびの受賞、誠におめでとうございます。心よりお喜び申し上げます。

さて、今回の皆さんの受賞作品では、「人と人の愛や友情」を描いて、人生にとっての大切な生き方が込められています。

作品の特徴として、皆さんは、実際に経験できないものを童話作品に描き、実際にそのような場面に出会った時の対処方法などが描かれております。

皆さんは、童話を創作する中で、人が人として共に生きていく上で必要な「教え」を、自ら考え、童話を通じ描くことで、自分自身の社会人に向けての生き方のアピールであり、まさしく、久留島武彦先生の教えにありますように、「童話は人生最初の哲学書」です。

このように、創作の世界に広がっている皆さんの作品を通じ、「童話」が持つ未来に向けての皆さんの力を
実感しました。

また、「やさしさ」や「思いやり」など、力を合わせて困難を乗り越えていくように、お互いの違いを認め
合つて、ともに生きていこうという考え方など、社会性を高めたりするのに童話は重要な役割を果たしてい
ると、感動を覚えました。

「久留島武彦童話賞く子ども創作童話コンクール」は、今年で7回目を迎え、この賞を継続することが
できたのも、選考委員の皆様をはじめ、応募を取りまとめたいただいた学校関係者の皆様方の御理解、御
支援をいただいているおかげであり、そして、何より、児童生徒の皆さんからの応募があったからこそと、心
より感謝申し上げる次第です。

「多くの皆様方に、『温かみのある心のふれあい』を届けたい」という願いで、本日の受賞作品を一冊の作
品集に収録します。

最後になりますが、御応募いただいた皆様、選考委員の皆様、応募に御協力いただいた学校関係者の皆
様方の御健勝と、今後ますますの御活躍を御祈念いたしまして、挨拶とさせていただきます。

【ごあいさつ】

「第7回久留島武彦童話賞く子ども創作童話コンクール」によせて

久留島武彦記念館 館長
金 成妍^{キム ソンヨン}

この度は「第7回久留島武彦童話賞く子ども創作童話コンクール」にご応募いただきました181名の皆さま、誠にありがとうございました。そして、受賞された15名の皆さま、ご家族、学校関係者の皆さま、おめでとうございます。

日本のアンデルセン・久留島武彦先生が生まれた大分県玖珠町^{くす}には、先生の童話活動50年を顕彰する巨大な童話碑があります。その除幕式が行われた昭和25年（1950）5月5日の子どもの日、久留島先生は童話碑の前に凛と立ち、次のような言葉を大きな声で語られました。

「この童話碑は、玖珠町に生まれた私が、子どもたちに童話を語り始めた記念の一里塚^{いちりづか}です。この地を起点にして、童話を書いたり話したりする人が、日本じゅうにたくさん出てきてほしいと願っております。」

久留島先生のこの思いを継承するために創設したのが「久留島武彦童話賞」です。このコンクールがきっかけ

となって「童話を創ってみよう」と思い立ち、自分の中で一つの世界を創り上げ、それを表現するために原稿用紙に手書きで「書く」という行動を起こし、それを最後まで「書き切る」子どもが、今年も181名もいたことを、心から嬉しく思います。

私たちは今、AI（人工知能）を立ち上げて音声を入力すれば簡単に文章が書ける時代を生きています。スマートフォンやパソコンが当たり前になり、指先でタイピングして済ませることが殆どです。自分で考えたことを、自分の手で、人にしか与えられない言葉を整えて書くという能力は、久留島先生が自分の人生をかけて教えた「生きる力」の土台になるものだと思います。

ご多忙にもかかわらず、コンクール実施に当たりご尽力いただきました皆さまに心からお礼を申し上げます。来年も夢あふれる皆さまの作品に会えることを楽しみにしております。

【ごあいさつ・選考講評】

有限会社 花書院・絵本専門士

柴田 しばた 香 かおり

「第7回久留島武彦童話賞く子ども創作童話コンクール」において受賞されました皆さま、このたびは本当におめでとうございます。物語を読んだり創作したりするのが好きな子どもたちから多くの作品が集まり、回を重ねるごとにそのレベルもどんどん上がっています。柔軟な発想力をもって紡がれた作品はどれもみずみずしくそれぞれの輝きを放っていて、選考はとても難しく同時にとても楽しい時間です。

審査員として応募作の手書き原稿と対峙していますと、筆跡、筆圧、表記の仕方など、原稿用紙の行間から作者の真剣な表情が見え、息遣いがきこえてくるようです。このコンクールにおいて、久留島武彦記念館の金館長が「応募作品は本人の手書きの原稿とすること」とされているゆえんは、なるほどこういうことかと感じ入っています。

この先、目覚ましいAIの進化により、物語の作り方や組み立て方はこれまでと大きく変わってくる点もあるでしょう。しかし、「その人にしか紡げない言葉」はAIがどんなに学習し、精度が上がったとしても機械ではなかなか出せないもので、そこがこのコンクールでも大切にされているオリジナリティにつながるのではないかと感じています。

第一七二回芥川賞を受賞された鈴木結生さんは、小学一年生の時に「どうぶつにつき」という物語を初め

て書いて、夏休みの自由研究として絵本のかたちにされたのだそうです。この中からも未来の小説家や絵本作家がうまれるかもしれませんね。

感性ゆたかな皆さんの人生に、これからも素晴らしい物語との出会いがたくさんありますように。

小学生の部 大賞 『しゃべる!?みかんの皮』

内気な小学三年生、主人公「宙」が、しゃべるみかんの皮「ミカワ」と出会って変化していく様子や心の動きが生き生きと描かれていました。特に状況描写の表現が丁寧で巧く、キャラクターの持つ魅力がしっかり伝わってきます。物語全体を通して緩急のリズムもあり、陳皮となったミカワの結末での収め方も見事でした。

積極的に自分の意見を言うのは難しい、と思っている主人公のような読者が、勇気を出して一步を踏み出すための「心のお守り」になるような作品だと感じました。自分にとってそういう「心のお守り」となる物語を持つておくことは、作品を創作する上でも、この先長い人生を生きていく上でも大きな支えになってくれることでしょう。

小学生の部 佳作 『こまつたきゆうしよく』

個性的なぬいぐるみ達のキャラクターの書き分けが上手で、困りごとがありながらもわいわい賑やかで楽しいクラスの様子が表現されていました。同時に給食時のルールやマナーを押しつけがましくなく読者に伝えられており、食育という観点からも高く評価できます。きっと作者は給食や給食時間が好きなのではないでしょうか。身近な素材から創作の種を見つけ、大きく育てていく力をこれからも伸ばして欲しいと感じました。

小学生の部 選考委員特別賞 『ことり』

登場する二羽の小鳥は「メジロの父さん」と「ぼうや」。わたしはかつて子どもで、いまは二人の子どもを育てる親なので、「ぼうや」の立場の視点からと「父さん」の立場の視点からのどちらにも大いに共感をもって読みました。「子どもの自立」をテーマに二羽の心の動きがオノマトペを効果的に使い、よく表現されています。ひとり立ちまでの困難や試練を乗り越えて、晴れた青空を悠々と飛ぶ「ぼうや」の姿が目に見えそうです。

小学生の部 読売新聞社賞 『太ったミミズ！』

太ったミミズは宇宙からきたミミズ型UFO(MFO)、髪留めのピンはナッツが作った爆発盗聴器など、作品の中に独創性のあるアイデアがたくさん盛り込まれていて面白いです。普段なにげなく見過ごしている風景の中にも宇宙とのつながりはたくさんあるのかもしれないね。既定路線でのハッピーエンドかと思いきや、ラストがシュールでSF作家としてのセンスが光ります。ショートショートにもぜひチャレンジしてほしいと思いました。

中学生の部 大賞 『月が輝くその地でもう一度』

猟師になって三年目、十九歳の「俺」とオオカミとの心の交流を描いた作品。自然の中で生きるという重厚なテーマを取り上げた意欲作です。オオカミを駆除する村のチームでの判断と「俺」個人としての思いに揺れる葛藤の場面では、作者の感情を乗せ過ぎずに客観的な視点をもった熱量で展開させ、読者を信頼して話を組み立てることが出来る書き手なのだと感心しました。文体もこれまでにたくさんの本を読み、自分でも作品を書いてきたであろう手練れの感じが伝わってきます。じっくりと最後まで読ませる筆の力は、力作ぞういの応募作の中でもひとときわ安定感がありました。

中学生の部 佳作 『雨粒の願い』

「自分が何を使命とし、どのように生きていきたいのか」。早い段階でそれを見つけ、まっしぐらに進むことのできる人は素晴らしいですが、これを見つけることは大人でもとても難しいことです。わたし自身も未だに迷うことがあります。このテーマに向き合い、ぎゅっとエッセンスを凝縮して物語にまとめた点が秀逸です。進路選択など、これから様々な岐路に立つ若者たちに手渡したい物語だと思いました。

中学生の部 選考委員特別賞 『いつか会う貴方へ』

科学の国の天才科学者ジェニーは魔法の国の少女アムールと心を通わせることによって、愛し愛される関係性を知り、二国間で長く続く戦争を終わらせることができました。現在、世界では50以上の武力抗争が続いていると言われています。普遍的で現実世界にも共通して抱える問題を、読者が自分ごととして捉え、咀嚼し、問題提起するきっかけになるようなテーマ選びの選球眼をもって、これからも書き続けてほしいです。

中学生の部 選考委員特別賞 『輝く希望を夢見て』

少年少女にとって叔父（伯父）や叔母（伯母）は、身近な血縁でありながら少し離れた立ち位置から見守り育ててくれ、親とはまた違った影響を与えてくれる大切な存在であると言われています。「夏凜」にとって「公子おばちゃん」は生きる姿を通して大切なことを教えてくれる存在であつたのでしょうか。作者のまわりにも魅力的なおじさん、おばさんがいるのでしょね。心の柔らかな思春期の読者に読んでもらいたい一篇です。

中学生の部 久留島武彦記念館館長特別賞 『化け狐のきつちゃん』

起承転結が明確で心地よいリズムがあり、まるでお芝居を見ているかのような感覚でラストまで読み切ることができました。創作童話というジャンルを意識し、そこにしっかり焦点を当てて書かれている点が特に優れています。自分だけではなく、周りの友達もみな動物だったというオチは意外性があつて面白く、もしかしたら私たちの身近にもいろいろな動物が人間に化けているかもしれないと想像力が掻き立てられました。

中学生の部 読売新聞社賞 『めぐり逢いは再び』

狼のリアムとうさぎのリリーとの心の交流が温かみのある文章で描かれています。謎解きの要素や脇を固める登場人物も丁寧に表現されていて、プロット設計の解像度の高さや作品への思い入れが伝わってきました。小道具としての「本」の使い方も上手です。リアムの言葉でリリーの心がよみがえり、もう一度会うためにこちらの森へ来たということが明かされるラストは思わず胸が熱くなりました。

高校生の部 大賞 『桜の木と青い宝石』

自分の青い目が嫌いだった「まこと」が「あの屋敷」に住む「さくら」との交流を回想し、唯一無二の自分の目を好きになったきっかけを語る物語。作品全体がノスタルジックな雰囲気を感じ、読み進めるうちにどんどん物語の世界に引き込まれていく情景描写の巧みさが大きな魅力だと思いました。どこまでが幻でどこまでが現実か立ち止まらせる余韻の残し方が絶妙です。

「物語を書く」ことは自分の内面の奥の奥まで潜っていき、本質を見極める作業でもあります。多感な時期にコンプレックスや自己肯定感をテーマに自己やまわりと向き合い、それを昇華してこのような作品に仕上げるのできる作者は素晴らしいと感じました。

高校生の部 佳作 『自分のたのしみ 他人のしあわせ』

「色」を見たことがない男の子と「光」を見たことのない女の子という独創性のある二人を主人公に据え、深みのある繊細な心理描写が展開されています。誤解で行き違った二人がそれぞれ違う道を歩んでも、心の中に大切な存在としてのお互いをもっているというのは大人の感性に近いものがあります。様々な立場から俯瞰的に物事をみることができ、人間観察に長けている作者ではないかと想像しながら読みました。

高校生の部 選考委員特別賞 『わがままな王と幸せの花』

植物を世話し育てることで人格も育っていく。「花育」という言葉が一般的になる前から長く言われ続けてきていることです。思いやりと誠実さを持つて花を育てることで、わがままで自己中心的な王の心が変わっていき、本当に大切なものを知る構成は、短編としてオーソドックスながらテーマの核の体幹がしっかりしていて安心でき、好感をもって読むことができました。

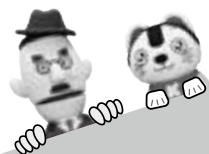
高校生の部 久留島武彦記念館館長特別賞 『私を認めてくれる一人のへび』

困難にぶつかっても誰か一人でも絶対的な味方がいれば立ち向かっていける。タイトルのような経験を持つ方も多いと思います。「へび郎」との出会いによって変わっていく「ナナ」に多くの読者が共感を抱きながら読み進められるのだと思います。本文中では「へび郎」を「一匹」と数えています。が、タイトルを「私を認めてくれる一人のへび」としたところには深い意図が隠されているのでしょ。うか、気になります。

高校生の部 読売新聞社賞 『にんじんを求めて』

厳しい自然の中での「食うか、食われるか」の世界にフォーカスを当て、「母ウサギ×狼」「子ウサギ×狼」「母ウサギ×子ウサギ」の三つの関係性を軸に物語がテンポよく展開されています。まるでドキュメンタリー番組をみているかのように臨場感のある、自然界を生き抜くそれぞれの心理描写が見事です。読後、「ニンジン」の示すものとはなにか、あらためて深く考えさせられました。

【小学生の部】



【大賞】

しゃべる!? みかんの皮

豊中市立南丘小学校 4年

ひさの なつき
久野 夏葵

私の名前は宙。宇宙の宙と書いて「そら」と読む。星とか空が好きな小学三年生で、とにかく内気で引っ込み思案な性格だ。

ある日、朝ごはんのデザートにみかんが出たので、テーブルの端に置いてあった黒のサインペンで、おいたみかんの皮になんとなく顔を描いてみた。右目がくりくり丸くて、左目はくの字みたいなウインクに。口は笑った感じにして……最後に、大好きな北極星をどこかに描き足して、左目の横に小さく星型のマークを一つ描き足してみた。なんだかキラッとした笑顔で自信あり気な表情になった。

「我ながら上出来。おつと学校に行く時間!」

早歩きの子か思ったよりも早く学校に着いてしまったので、私は大人しく昨日図書室で借りた星座の本を読むことにした。本当は、教室の前の方でしゃべりしているサヨちゃんとエリちゃんに交ざって私もおしゃべりしたかったんだけど、なんだか話しかける勇気がなくて……。

その時、不思議な事が起こった。

「サヨちゃん、エリちゃん、何の話しているの?」

誰かが私の声で二人に話しかけたのだ。

(えっ!? 今の私の声? 私、しゃべってないのに!)

私がびっくりしていると、

「夏の大三角の話だよ。そういえば宙ちゃん、星とかくわしかったよね。」

とエリちゃんが私に話しかけてきた。続いてサヨちゃんも、

「デネブとベガと、あと何だっけ?」

と聞いてきたので、

「アルタイルだよ。わし座の。」

と、私はとっさに答えた。

「おう、やっぱり宙ちゃんくわしい！」

「もつと星の事教えて。」

「う、うん！」

それから、私たちは一時間目のチャイムが鳴るまで星の話でとつても盛り上がっていたのだけれど、あの謎の声は何だったんだらう。気になって算数の授業が頭に入ってこないよう。集中しなきや。

「はい、これ分かる人。」

と、先生がみんなに言った。だけど誰も手を挙げない。
(私、これ分かる……けど答えが合っているかどうか自信がないから言わないでおこう。)

「はい、九千二百五十です。」

(えっ!? また私の声で誰かが答えを言っている?)

「山崎さん、正解です。よくできました。」

え? これはどういうことだらう。あせてって周りを見まわすと、あっ! 顔を描いたみかんの皮が筆箱の中にある! 学校に持ってきた覚えはないのに。

「やあ、ぼくみかんの皮だよ。」

みかんの皮がしゃべった! でも、隣の席のユウタ君は気付いていない。

(私にしか聞こえていない? 気のせいかな、みかんの皮がしゃべるわけないよね。)

「どうしたの? 宙ちゃん。」

(ま、またしゃべった。)

キンコンカンコン……ナイスなタイミングでチャイムが鳴った。

「これで、一時間目の授業を終わります。起立、礼。」

えーっと整理すると、私が朝、顔を描いたみかんの皮が学校に付いてきて私にしか聞こえない声で話しかけてきた。さらに私の声を真似することができて、勝手に私のふりをしておしゃべりができるっていうこ

と？

「宙ちゃん、すてきな顔を描いてくれてありがとう。ぼくは、宙ちゃんが今よりもっと積極的になるようにお手伝いたいんだ。」

キラんつとした笑顔で、みかんの皮が言った。

「静かにしてよ。出るくいは打たれるって言うてしょ。目立ったり、自分の気持ちを誰かに言って否定されたりするの、私は嫌なの。」

「そんなの気にしなくてもいいよ。当たってくだけろとも言っただし。」

「また何か言ったらテープでぐるぐる巻きにしちゃうよ。」

思いつきやらんでやったら、みかんの皮はふるえ上がって筆箱の中にかくれちゃった。

（みかんの皮のくせに痛いところをついてくるなあ。みかんの皮……言いくにから、縮めて呼ぼう。）

私はみかんの皮に「ミカワ」という名前を付けた。

残りの時間はミカワが口を出さなかったおかげで、無事に学校を終えて家に帰った。夜寝る前に、ミカワは「明日もいっしょに学校に行くからね。」

と、キラんつとした笑顔でウインクをしながら言った。

「はいはい。お休みなさい。」

よく朝、朝ごはんのデザートにバナナが出たけれど、またおかしなヤツが増えたら困るので、バナナの皮には何も描かずに家を出た。

一時間目の国語は何も起きなかった。二時間目は体育。体操服に着替えながら、（今日は跳び箱かあ。苦手なんだよね。はあ。）

思わずため息が出てしまった。

私は一番低い四段の跳び箱の列に並んだ。四段の列を選ぶ人は少ないので、すぐに順番がきてしまう。私はため息と共に走り出した。跳び箱に手をつける、まてはいいんだけど……思いつきり跳び箱にお尻が乗った。乗った。

（ほらね、やっぱり出来ない。）

と、ちょうどその時笛が鳴った。

「誰か七段跳びたい人いませんか。」

先生が言った。誰も手を挙げない。だけど……

「はい！私やりたいです。」

（ミカワ！！）

体操服のポケットにかくれていたミカワが私の声で立候補してしまった。

「はい、じゃあ山崎さんやってみて。」

私はしぶしぶと七段の跳び箱の前に行った。四段でさえ跳べないのに、しかもみんなに見られている恥ずかしさといったら。でも、ここまできたらやるしかない。私は大きく息を吸って走り出した。手をつける位置はバッチリだ。……って、あれ？

（跳べてるじゃん！）

「宙ちゃんは背が高いから、七段くらいがちやうど跳びやすいんだよ。」

ミカワがポケットから解説してくれた。ウインク付きで。

元の位置に戻ると、サヨちゃんが小さくピースを向けてくれた。私もピースをした。跳び箱がすごく楽しく思えてしまった。

その日の昼休み、校庭で隣のクラスの男子が私のクラスのボールをうばってケンカがぼつ発した。私までエリちゃんに校庭（戦場）へ連れていかれた。最悪。

戦場では、隣のクラスのやんちゃな男子軍団と私のクラスの女子軍団が言い合いをしていた。

「宙も何か言っちゃってよ。」

サヨちゃんに言われたけど、男子に言うなんて怖いし無理だよお。

「宙ちゃん、がんばって！」

ミカワがスカートのポケットから声援を送ってくれている。

（もう嫌だ。あゝもう、当たってくだけるしかないじ

やん！)

「そのボールは、私たちのクラスの物だよ。返してよ！」

自分でもびつくりするくらい大きな声が出た。恥ずかしい。でもなんだかすっきりした気分。その後もしばらく言い合いは続いたけれど、騒動を聞きつけた先生がやってきて問題は解決した。

はつきり言うっていいな。くだけでもいいから当たってみよう。もっともっと。

その日から、私はミカワにアドバイスをもらいながらどんどん当たっていった。もう、一人でも大丈夫。

ミカワが学校に付いてこなくなつて一週間後、事件は起こった。家に帰つて机の引き出しの中にいるはずのミカワを見ると、なんとミカワは水分がすっかり抜けてからからに干からびていたのだ。

(もうしゃべりかけてくれないのか。さみしいなあ。今までありがとう。)

干からびたミカワにお礼を言つて、お墓を作つてあげるべきか迷っていると、部屋をのぞきにきたお母さんが、

「あら、みかんの皮？乾燥したみかんの皮は陳皮つて言つて、お風呂に入れると体を温める効果があるのよ。」

と教えてくれた。

夜、私は湯船にただの干からびた皮になつてしまったミカワを入れてお風呂に入つた。あゝ温かい。ミカワつてとことん役に立つんだなあと思ひながら、ふとミカワを見ると、

(ん？何かふつくらしてきてない？あれ、動いてる？)「ぶつはあ。宙ちゃんありがとう、水分たっぷり元に戻つたよ！」

キラリとした笑顔でミカワがしゃべつた。え、えゝ！「ミカワが生き返つたゝ!!」

【佳作】

こまつたきゆうしよく

愛媛大学教育学部附属小学校 一年

わかき
そう
若狭 早

ぬいぐるみの町にある、小さな小学校。ここにかよう子どもはみんな、ぬいぐるみです。もちろん、先生もぬいぐるみです。じぶんであいて、おしゃべりしてこくご、さんすう、音がく、たいいく。ごぜんのじゆぎようがおわったら、おたのしみのきゆうしよくのじかんがはじまります。

一年花ぐみの子どもは五人です。青いくまのくまブルーちゃん、まるいペンギンのペンペンちゃん、はちまきをしているぶたのいちぶうちちゃん、せのたかいトカゲのトカゲーヌちゃん、みどりいろのトリケラトプスのケラリーヌちゃん。たんにんの先生は、トリケラト

プスのケラケラ先生です。ケラリーヌちゃんのおかあさんで、きいろくて大きなからだをしています。花ぐみのみんなできゆうしよくのじゆんびをして、くばりおわったら日ちよくさんがあいさつします。

「手をあわせましょう。いただきます。」

「いただきます。」

きゆうしよくがはじまると、ケラケラ先生は大いそがしになります。

「ケラー！」

これはケラケラ先生がおこるときのこえです。くまブルーちゃんがデザートのはちみつヨーグルトを先にたべてしまったので、ケラケラ先生はちゅういします。

「デザートは先にたべちゃだめ。まずはごはんとおかずをおいしくたべなさい。」

「はーい、わかりました。」

くまブルーちゃんは、はちみつが大すき。はちみつゼリーが出たときも先にたべてしまい、ケラケラ先生におこられていました。

「ケラー！」

こんどはペンペンちゃんがおこられます。ペンペンちゃんはおさかなだけをたべてしまい、ごはんもおやさいもぜんぜんへっていません。

「さんかくたべをしなさい。一しゆるいだけたべるのはよくない。」

「でも、おさかなが大すきなんです。」

「すきなものだけたべて、ほかのものがたべられなくなったらこまるでしょう。」

「はい、わかりました。」

ペンペンちゃんはごはんもいっしょにたべてしっかりとぐもぐするようになりました。ケラケラ先生はひとあんしんです。

コロコ、コロコロ。おはしがおちる音がしました。いちぶうちゃんのおはしです。いちぶうちゃんの手はひづめなので、おはしが上手につかめません。ケラケラ先生はおこらずに、スプーンとフォークを出してあげました。

「先生、ありがとう。」

いちぶうちゃんはスプーンをもつと、あつというまにきゆうしよくをぜんぶたべました。そして、おかわりをとりにいきました。

「ケラー！」

それを見て、ケラケラ先生がおこりました。なぜなら、いちぶうちゃんがごはんもおかずもデザートもぎゅうにゆうも、ぜんぶとろうとしたからです。

「すこしずつおかわりしなさい。ほかにもたべたい子がいるでしょう。」

「はい、わかりました。」

いちぶうちゃんはなんともちゆういされていますが、ついせんぶとつてしまいます。きゆうしよくが大すぎなのはわかりますが、ひとりじめはよくないのです。「いちぶうちゃん、はちみつヨーグルトはのこしておいてね。」

くまブルーちゃんがいいました。デザートはとくに人気なので、いつもじゃんけんしておかわりする人をきめることになっています。

「いいよ。みんなたべおわたかな？」

早くじゃんけんをしたい、いちぶうちゃんはきょうしつを見まわします。すると、トカゲーヌちゃんのきゆうしよくがぜんぜんへっていませんでした。

「ケラーー！」

ケラケラ先生も気づいて、トカゲーヌちゃんをおこります。

「ごめんなさい。おへらしするの、わすれていました。」

花ぐみでは、きゆうしよくがくばられたとき、おおすぎるとおもったら「おへらし」してもいいことになっています。トカゲーヌちゃんはすききらいがおおいので、おへらししないときゆうしよくがおわりません。「おへらしはさいしよにしないさい。」

「はーい、わかりました。」

トカゲーヌちゃんは、きゆうにゆうをいちぶうちゃんに、おさかなをペンペンちゃんにあげました。おやさいは、いきをとめてぱくつとたべました。

ぺちやくちゃ、ぺちやくちゃ。ケラーーヌちゃんが、お口にごはんを入れたままおしゃべりをしています。

「ケラーー！」

もちろん、ケラケラ先生におこられます。ケラーーヌちゃんはきゆうにゆうをのんで、お口の中をきれいにしてから、

「ごめんなさい。」

ケラケラ先生にあやまりました。

「おぎょうぎわるいことはしないように。いっしょにごはんをたべる人が、いやなおもいをするでしょう。」

「はい、わかりました。」

ケラリーヌちゃんは、おうちでもちゅういされたことをおもい出しました。

「ごっくんしてから、おしゃべりしてね。」

ケラケラ先生は、ケラリーヌちゃんのおかあさん。学校ではきびしい先生ですが、おうちにいるときはやさしいです。ケラケラ先生をこっそり見てから、ケラリーヌちゃんは、ぺちやくちや音をたてないようにまりました。いちぶうちやんが、こえをかけます。

「デザートじゃんけん、したい人。」

「はい。」

「はい。」

「はい。」

トカゲーヌちゃんいがいの四人で、じゃんけんをするようになりました。

「先生、じゃんけんしてください。」

くまブルーちゃんが、ケラケラ先生におねがいしました。花ぐみてじゃんけんをするときは、ケラケラ先生にかつた人がのこつていきます。じゃんけんをする人がそのばにたつて、まけたらすわります。

「じゃん、けん、ぼん！」

「やつたあ！」

「ざんねん。」

ペンペンちゃんとケラリーヌちゃんがかちました。くまブルーちゃんはいこ、いちぶうちやんはまけてしまいました。ペンペンちゃんとケラリーヌちゃんは、たつたまま手を大きくのばします。また、ケラケラ先生とじゃんけんです。

「じゃん、けん、ぼん！」

「あれれ。」

ケラケラ先生はグー、ペンペンちゃんとケラリーヌちゃんはチョキ。二人とも、まけです。

「だれものこらなかつたから、はちみつヨーグルトは、先生がもらいます」

「えー。」

「いいなあ。」

ケラケラ先生はいそいではちみつヨーグルトをたべました。きゅうしよくのじかんがそろそろおわりです。日ちよくさんのいちぶうちやんがまえに出てきて、あいさつします。

「手をあわせましょう。ごちそうさまでした。」

「ごちそうさまでした。」

トカゲーヌちゃんはたべるのがゆつくりすぎて、まだデザートがおわっていません。

「ケラーー!」

やれやれ、こまったきゅうしよくです。

【選考委員特別賞】

ことり

豊田市立浄水北小学校 3年

畑 はた 美 み 怜 れい

ある晴れた日のことです。二羽のことりが、トチの木からとび立とうとしていました。

「いいかい、あの木の枝まで、とんでみるんだよ」

メジロの父さんがいいました。

「うん。ぼく、がんばってみるよ」

ぼうやはいさましく羽をふるわせましたが、心はおじけづいていました。今日は、生まれてはじめて空をとぶ日なのです。

もう何日も雨がふらないので、メジロの親子はどがからからでした。あまりに暑いので、ぼうやはくら

くらしで、いまにも枝から落ちそうになりましたが、えいっと力をふりしぼってつばさをひろげました。

「いいぞ、よくやったーよし、ごらん。あの赤い屋根の家の庭に、お池があるよ。いまから、あそこまでいくからね。」

そのお池には、おいしそうな水がきらきら光っていました。ぼうやはすっかり心をうばわれて、それがどんなに遠くても、すぐにとんでいける気がしました。でも……。

「ぼく、やっぱりこわいよ。」

ぼうやはぎゅっと目をとじて、枝にしがみつきました。

「できるさ、ぼうや。勇気をだして。」

父さんはやさしく、力強いいました。

「さあ、あの水べまで」

親子はそろってとび立ちました。

「がんばればうや、チイ、チイ、チイ」

父さんは、ぼうやの前をとびながらうたいました。
ぼうやは夢中でおいかけました。

—さあ、もうすぐだ—

お池のふちについたとき、ぼうやのすがたはありませんでした。赤い屋根にぶつかって、ころがり落ちてしまったのです。

「チー、チー、チー」

ひっくりかえったぼうやは、立ち上がろうとして、
いっしょうけんめいもがきました。

「がんばればうや、ここまでおいで！」

父さんは、大きな声ではげしました。

そのときです。庭のさわぎをききつけて、家からだ
れかが出てきました。

「あれあれ、おかしいな。鳥がとべずに、あばれているぞ」

ふしぎそうな顔をして近づいてきたのは、人間の
子どもでした。

—たいへんだ—

父さんは、知っていました。やさしいふりをして、な
にをするかわからないのが人間なのです。

あの日のおそろしい出来事を、父さんは思い出し
ました。ぼうやのえさをさがしに出かけた母さんが、
わなにかかって人間につかまえられてしまったのです。
かごの中で、かなしそうに鳴いていたのが、母さんを
見たさいごでした。

父さんは、はりさけそうな気持ちでさけびました。

「ぼうや、いま助けにいくからな！」

そのときでした。小さな人間の手が、ぼうやをそっ
とひろいあげました。それから、ぼうやの父さんが待
つ水べまでつれていき、そこにはなしてやりました。
ぼうやは、うれしそうに水しぶきを上げました。

「ぼく、ぜんぜんこわくなかったよ。」

そういつて、おいしそうに水をのみました。

「そうか、そうか。」

父さんも、うれしそうに水をのみました。

二羽のことは、なかよく水あびをして、それからとび立ちました。

「チイー、チイー、チュル、チュル」

あかるい歌声が、風にのって空をかけぬけました。

「ぼく、ぜんぜんこわくないよ。」

元気な声が、青空いっぱいにひびきました。

「ぼく、もう空をとべるよ!」

【読売新聞社賞】

太ったミミズ！

宇部市立厚南小学校 3年

なかしま みさき
中島 美咲

あるところに、他の人とお話をするのが苦手でもう3年生になるのに友だちが一人もないハナという女の子がいました。

9月のある暑い暑い日の登校中、ハナは汗をふきながらぬれた葉っぱを見てつぶやきました。

「昨日雨がふったからな。」

「今日の図工いやだな。」

「はあくなんか楽しい事ないかな。最近楽しい事全然ないよ。」

「あれ？あれはミミズ？」

ハナの足元にはハナの人差し指くらいの太さの少

し干からびたミミズがいたのです。きつと昨日雨がふったので出てきたのでしょうか。

ハナはミミズが少し動いているのに気づき、この大きなミミズをどうするかしばらく考えました。

「そうだ！このミミズをかう事にしよう。」

ハナは図工に使うふたつきのカップとつまようじをたまたま持っていたので、そこら辺の土を入れて、ふたにつまようじであなを開けて、ミミズを入れました。ハナはカップをランドセルに入れて、学校に持って行きました。

ハナは休み時間にミミズの名前を考えていました。

ハナが考えていると、リナとミナに

「さっきからずっとぼーっとしてるけどどうしたの？

何か考え事？」

と聞かれました。「ミミズの名前を考えてる。」なんて言ったらどうせわらわれるんだろうな、と思いがらも小さな声で

「ミミズの名前を考えてる。」

と言いました。すると、

「ミミズかうの？いいね。わたしはさわる事はできないけどミミズはかわいいから好き。」

「名前をつける時は、鳴き声やしゅるいに、太郎とかリンとかつける事が多いねん。」

リナとミナはやさしい言葉を返してくれました。ハナはさつきより少し大きな声で、

「そうなんだ。ありがとう、ミナちゃん、リナちゃん。」

とお礼を言いました。

「当たり前だよ。私たち友だちじゃん。目が合って、そこからおしゃべりとか一緒に遊んだらもう友だち。

あとさ、ミナちゃんじゃなくてミナだけでいいよ。」

ミナが言いました。リナもその後

「せやで、もううちら3人は友だちやから、うちの事も、もう、ちゃんづけせんでええで。」

3人はその後いっしょに帰る事をやくそくしまし

た。

下校時間、今度はかつこいいミナやリナみたいに、自分から話そう、と思ったハナは、

「ミツ……ミミズのかいかたって知ってる？私分かんないんだ。」

リナは、かんたんにかい方を教えてくれました。言い終った後に、

「ハナきんちようしすぎやで。そういう時はしんこきゆうをしたらええねん。」

「すう、本当だ！少し落ちついたかも。そういえばリナって、とっても物知りだね。」

ハナはこの日、2人の友だちが出来ました。

ハナは家でミミズの名前を考えました。

「うーん……そうだーミミミにしよう。」

次の日ハナは朝起きて、ミミミの様子を見に行きました。すると、なんとミミミが入っている箱からカタンと音が聞こえて来るではありませんか。ハナがおどろい

て中を見ると、ミミから、見た目は同い年くらいだけど、ハナの小指くらいの男の子が出てきているではないですか。

その男の子はハナに向かって話しかけてきました。

「ぼくの名前はナッツだ。ピ。フード星からやって来たんだ。ピ。どうしてこの星に来たかというと、ぼくはみんなグルメだからおいしいごはんのレシピをさがしに来たんだ。ピ。」

「ちょっと待ってよ、じゃあこのミミズは何？ どうしてあんな所にいたの？」

ハナは少しあせり始めました。

「あのね、実は、これはミミズ型UFO、りやくしてMFOだ。ピ。そしてどうしてあんな場所にいたかというど、おいしいにおいにさそわれて空をとんでいたんだけど、なぜかMFOがこしようして落っこちた、ということだ。ピ。だれかきょう力してくれないかな。」

と言いながら、チラッとハナの方を見ました。

「仕方ないなあ、出来る事はするよ。」

「ありがとう。ピ。一つ目は、この星のおいしいごはんを教えてほしい。ピ。2つ目は、ぼくがいる事はヒミツにして。ピ。3つ目は、ぼくの星に帰る方法を探して。ピ。」

「えっと、この星でおいしい食べ物ね、うーん、なにがおいしいかな…あっお母さんが作ってくれるからあげだよ。」

「そのからあげの作り方を教えてほしい。ピ。」

「うん、いいよ。からあげの作り方なら私がつてるから教えてあげる。」

ハナは作り方を教え終わると、ナッツをハナのハンカチの上に乘せて

「おやすみ。ナッツ。」

と言って電気を切りました。次の日、ハナがナッツのいるハンカチのそばにいくと、ナッツが小さなピンを持っていました。

「このピンをハナにあげる。ピ。」

「ありがとう。学校につけて行くね。」

ハナが学校に行き、ミナとリナに

「おはよう。ミナ、リナ。」

と言うと、リナがタタタタッとハナの所にやって来て、
ピンの事をほめてくれました。

「ハナ、そのピンめっちゃかわいいやん。」

ミナもハナの方にやって来て、

「ほんとだ！かわいい。」

「ありがとう。実はね、これは宇宙人のナッツっていう
子からね、…ゴニョゴニョゴニョ。」

ハナはうれしくて昨日あった事をミナとリナにば
らしてしまいました。

「そうなんだ！じゃあ休み時間にまた話そう。」

3人はニコツと目を見合わせました。

休み時間になり、人が少ない校庭のすみっこに3人
は集まりました。その時、急に3人の間がピカツと光
ったかと思うとナッツがあらわれて言いました。

「ねえ、どうしてばらしたの？」

ナッツの悲しそうな顔を見て、ハナはあわてて、

「ごめんっ。つい話しちゃった。でもいっしょに協力して
くれると思うんだ。2人ともやさしい友だちだから。」

「いいよ。あとね、2人がやさしいこと知ってるピ。な
んでかっていうと、そのピンぼくが作った、ばく発とう
ちようきなんだピ。ヒミツをばらしてしまった時のた
めにわたしといたんだピ。これはね、ヒミツをばらし
た時、そのヒミツを聞いた人が自分の味方じゃない時
は、その人の口めがけて、ピンにしこまれたミニミサ
イルがとび出してばく発するんだピ。」

「ちよっと！ばく発なんてしたらあぶないじゃん。」

「あぶなくないよ。口の中でばく発するのは、とうが
らしと忘れ薬をまぜたはじけるキャンディーだピ。こ
れを食べたら辛くて水を飲んだりするピ。水を飲み
終わるころには忘れ薬がきいてくるピ。」

「なーんだ。びっくりした。」

3人声をそろえて言いました。

「なあこわれてもうた乗り物直すん、うちも手伝うでー!」

リナとミナはMFOをしゅうりするのに協力することになりました。

「ねえ、今こんな所でしゅうりしたら、他の子が来るかもしれないし、明日は土曜日だから、明日パクパク公園に集まろうよ。」

とミナが言いました。ハナも言いました。

「いいね。じゃあみんなのお弁当を作つて来るよ。」

「やった。ピー。ぼくもお弁当作り手伝う。昨日教えてくれたレシピーでお弁当作る。明日が楽しみだ。」

2人はお父さんもお母さんも寝ている朝早くにつそりお弁当を作りました。

4人はパクパク公園に集まりました。

「お弁当と、ばくのMFO持って来た。」

「この乗り物、ほんまミミズみたいやな。なんかちよつと干からびてる感じするわ。」

リナもミナもびっくりです。

「よし。がんばるぞー!」

3人ともやる気まんまんです。

「ちよつと持つて。はらがへつてはいくさはできぬ。まずは、はらごしらえた。」

みんなお弁当を食べ終わると、MFOのしゅうり方法を考え始めました。

「一回バラバラにしたらどうか？」

「そんな事したら二度と動かなくなる。」

「あつ、せや!干からびてる感やから、ちよつと水かけてみたらええんちゃう?」

「いいんじゃない。やつてみよ。」

チョロチョロ、インスタントラーメンの様に干からびたミミズのようなMFOが、生き生きとしたミミズのようなMFOになりました。

「ねえちょっと乗ってみてよ。」

ピカッ！ナッツを乗せたMFOが宙にうかびました。ナッツはフード星に帰るようです。

「さようなら。」

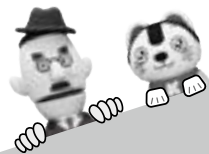
3人はいつまでも空を見上げていました。あつという間に帰ってしまつてさみしいな。でもわたしには友だちかできたし、前みたいになー人じゃない。いつかまたナッツに会えるといいな、とハナは思いました。

次の日、ハナが本を読んでいると、家のよびりんが鳴りました。ドアを開けると、

「こんにちは！今ひま？フード星のシェフたちがぜひこの星の料理を取り入れたいんだってピ。いいっピく？」

そこには、ナッツと小さなおじさんたちがうじゃうじゃと立っていました。

【中学生の部】



【大賞】

月が輝くその地でもう一度

世田谷区立用賀中学校 一年

しみず いちか
清水 市夏

これは、当時十九歳で、猟師になって三年目の俺が経験した「森の命」の物語。

始まったばかりの秋の空気に包まれて、昼の森はすでに葉を落とし始めていた。俺は、多彩な赤に彩られた地を踏みながら、うつすらと凹む獣道を歩いていた。肩に担いだシカが重くて、足が耐えられなくなってきたけど、そろそろ森を抜けて宿だと思うと、足は無理してでも勝手に動く。ふとどこからか、金属音のようなものが聞こえてきた気がした。足を止め、耳を澄ましてみたが、何も聞こえない。気のせいかと思

い、また歩き出した。ところが、

ワォーン

次はオオカミの声が聞こえた。それも、すぐ近くから。俺はシカを置いて身構え、万が一に備えて、担いでいた銃を手にした。この近さからだ、狙われている可能性が高い。ところが、いくら待ってもオオカミは現れない。不思議に思っただけで周囲を見渡すと、木立の向こうに微かに動く陰が見えた。俺は、シカを引きずりながら、静かにそちらへと近づいた。茂みに隠れながらそっと覗くと、そこには……イノシシ駆除用のワナにがっしりと後ろ足を捕らえられ、動けなくなった黒いオオカミの姿があった。ワナの杭が地面にしっかりと刺さっているのを確認した俺は、そっと茂みから体を出した。俺を見たら、オオカミが暴れ出すのではないかと思ったが、そこそこ弱っているらしく、伏せた

ままの体制でチラツとこちらに目を向けた。

俺は、代々続く猟師の家系に生まれ、小さい頃から、大自然と一体化して生きていくことに、途方もない憧れを抱いてきた。幼いころから、父のシカ狩りについていくことも多く、時にはオオカミとの追いかっこの末、木の上で命拾いをしたこともある。でも今、目の前にいるオオカミは、見たことがないほどおとなしくしていた。黒いそのオオカミと目があつた途端、今まで俺の中にあつた「オオカミ」という概念が一気に崩された。深く、深く、落ち着いたその瞳は、人間という存在に抵抗することそのものに諦めを感じた瞳だった。その瞳の柔い雰囲気、子供のころに飼っていた「タツシュ」というイヌの瞳とそっくりだと気づいた時、俺は自然と鉄砲の銃口を地へ向けていた。途端に、胸が締め付けられるような感覚に襲われ、オオカミが暴れないことを願いながら、俺は荷物を置いてオオカミの元へと近づいた。普段の俺ならと

るはずのない、ましてや、オオカミと追いかけることをしたこのある者は、絶対にとらない行動をとった。黒いオオカミは、静かに伏せていた。もう自分の命の行き先は、俺に託したとでもいうように。どうされても構わない、という顔をして。ワナは少し古びていた。俺は、固まって動かないネジを回すために、勢いよく力をかけた。オオカミの足には薄く血が滲んでいた。バネのチヂツという音が、静かな森に響く。

どれくらい手に力を入れていただろう。季節的には涼しくなってきたはずの空気の中で、俺の手のひらには汗が湧き出していた。

キュツガシャツ

ついにネジが回り、ワナが緩んだ。じっとしていたオオカミは、懸命に重力に逆らいながら立ち上がった。そのとき、俺は気づいた。オオカミの黒い毛皮の向こうに、うっすらとあばら骨が見えているということに。

オオカミは、せっかく立ち上がったにも関わらず、また伏せてしまった。ワナに必死に抵抗し続けたため、もう体力が底をついているらしい。俺はたまらなくなつて、持っていたシカをオオカミの前に置いた。そう、俺が一時間ほど前に狩ったメスのシカを。オオカミはしばらく俺を見つめていた。オオカミの目が問いかけてくる。いいの？と。俺は強く頷いた。

「ああ、いいよ。食え」

頷きが、言葉が、その意味が、目の前にいるオオカミに通じたのかはわからなかった。ただ、気持ちは絶対に伝わっていた。最初の方は、控えめにシカの腹を食いちぎっていたが、しばらくすると、口を大きく開けてかぶりついていった。

たまらない嬉しさが込み上げてきて、俺はしょうもないほどに目の前のオオカミが愛くるしく見えてきた。まるで、オオカミから逃げ回った思い出の全てが、嘘だったかのように。黒いオオカミは嬉しそうに、

おいしそうに、肉を食いちぎる。俺は初めてオオカミの笑顔を見た。本当に嬉しそうな顔だった。

やがて、黒いオオカミはお腹がいっぱいになったらしく、口の周りを舐め始めた。オオカミは立ち上がると、俺に近づいてきて、俺の匂いを嗅いだ。ペロツと俺の手の甲を舐めて、「本当にありがとう」といったような顔をした。

「そんな顔するな。別にいいよ。じゃあな。」

振り返って、別れを惜しんでいるような顔をしているオオカミに、俺は人の言葉をかけた。通じたかはわからない。でも、きつと伝わったと思う。走り去っていく黒いオオカミの後ろ姿が、いつもと違って、ものすごく愛おしかった。

宿に帰ると、何人かの猟師が集まって話をしていった。どうやら昨晩、近くの村の家畜がオオカミに食い荒らされたそう。数週間前から続くオオカミの襲

撃で、家畜の数が大幅に減少したという。森との境に高い柵を作るなど、色々対策は取ってきたらしいが、全て、オオカミに攻略されて終わった。

「いい加減オオカミを殺すべきだ。それ以外方法はないだろう。」

一人の猟師が言った。ざわつと賛成の声が上がる。俺の頭の中には、数時間前に見た、柔い瞳の黒いオオカミの姿が浮かんた。でも、家畜はかけがえのないほどに大切だ。それがわかる俺には、「オオカミを殺すな」なんてとても言えなかった。

夜、ベッドに入った俺は、薄茶の天井を見つめていた。目を閉じると、もう二度とあのオオカミの姿が思い出せなくなりそうで怖かったからだ。オオカミ駆除のために集められた猟師のチームは、夜に村で見張りをして、森から出てきた群れを取り押さえするらしい。きっとあの黒いオオカミも、その群れの一員なんだ。そう思うと、途方もない罪悪感が襲ってきた。

俺も駆除のチームに誘われた。もちろん断った。目の前で、昼間に命を救ったオオカミが死ぬかもしれない、そんなのに耐えられるはずがなかった。でも、それが目の前で起こるか否かで、現実是不一样的。自分てそんな思考を始めたくせに、余計に苦しくなつて、窓の外に目を移した。青白く光る有明月が、雲から顔を覗かせていた。黒いオオカミの柔い瞳が、頭の中で月に重なる。俺は飛び起きた。あいつが殺されるかもしれない。半日前に救った命が失われるかもしれない。それなのに俺は、ベッドに寝っ転がって現実逃避をしている。

「バカだバカだ。」

そう呟きながら、俺はコートを羽織つた。

外の空気は冷たくて、嫌というほどにまとわりついてくる。俺はコートの襟を掴んで、森に向かって走り出した。どうするべきかはわかってた。でも、どうや

ればいいのかはわからなかった。ただ、走った。森の中から、村に向かう。オオカミ達が今どこにいるのかもわからないのに。

俺は、しばらく走り回っていた。けれど、どこにもオオカミ達の姿はない。もしかして、もうすでに……嫌な予想が頭を横切った途端、ザッザッザッ枯葉を蹴ってオオカミの群れが、村の方から走ってきた。予想通り、あの黒いオオカミも群れの中にいた。オオカミ達は俺を見るなり、逃げ出そうとした。でも、黒いあのオオカミは違った。俺を見つけた途端に、俺の元に駆け寄ってきて、助けを求めるような目で俺を見つめた。きつと、家畜の見張りをしていたチームに追い返されたのだらう。その途端、俺は今するべきことがわかった。

「ついてこい。」

俺は走り出した。村とは反対方向に。森の奥深くへと。黒いオオカミは俺に続く。オオカミの群れは、黒いオオカミに続く。森の冷たい空気が、全身に当たる。

だんだんと息が苦しくなる。川が見えてきた。俺は川のほとりで立ち止まり、

「行け。」

と一言、オオカミ達にいった。オオカミ達は、水面に突き出した岩を足がかりにして、次々に向こう岸へと渡っていく。最後にあの黒いオオカミが俺の前で止まった。オオカミの頭の上に赤に染まった落ち葉がのっていた。

「なんかついてるぞ。」

俺はその葉っぱを取ってあげ、

「ほら、行け。」

と向こうの河岸を指した。黒いオオカミは、水面を跳ねるように駆けていき、向こう岸でこつちを振り返った。

「またな。」

俺はできる限りの大きな声で言った。

「ウォーン」

あの黒いオオカミが吠えた。群れがそれに続く。オオカミ達は身を翻して、森の中に姿を消した。最後の最後に、あの黒いオオカミが元氣よく走っていく。月の光が川に反射する。俺の手には、さっきの落ち葉があった。

あの後、俺は本の中にあの落ち葉を挟んだ。

「きつとまた会えるよな。」

「会いに行くよ」。

俺たち人と、お前たちオオカミは、きつともっと上手くやっていけるようになるよ。いつか、お前たちがいるその地で、美味しそうに肉を食べるお前の顔をもう一度見せてくれ。

【佳作】

雨粒の願い

福岡大学附属大濠中学校 3年

ごとう
りな
後藤 里菜

高い高い空の上、雲の中に小さな雫がいました。雫は他のたくさん雫達と一緒にもうそろそろ雨粒になろうとしています。周りの雫達は、

「俺はいつか海になるんだ」

「私は森に降りるのよ」

と楽しそうに話しています。しかし、その雫はなんだか浮かない表情をしています。雫はそっと呟きます。

「雨となって地上に降りるとき、僕には何ができるだろう。何をしたらいいのだろう。」

雫は悩んだすえに、太陽に話を聞きたいこうと思いい立ちました。太陽は地上のものを全てを平等に照ら

す。雫にとって憧れの存在です。雫の悩みを聞いた太陽は笑います。

「ほっほっほっ。」

太陽が言います。

「できることからいい。君がほんとうにしたいことをやりなさい。」

雫は分かったような分からないような妙な気分になりました。僕がほんとうにしたいことってなんだろう。僕にはそれが分からない。困った雫は星に話を聞きにいきました。星は地上の迷える生き物を導く、雫にとって頼りになる存在です。雫の悩みを聞いた星は笑います。

「ふふふふふ」

星が言います。

「何がしたいかは自分にしか分からないわ。自分で考えて見つけるのよ。」

雫はもう何がなんだか分からなくなってしまいま

した。僕は何がしたいのかな、何ができるのかな。そもそもたった一滴の雫に何ができるといふのだろうか。雫は悩めます。他の雫達と一緒にの所を目指したいのかな。でも他人の真似ばかりしていいのかな。やっぱり自分で決めた方がいいよね。ああ、でも僕は何がしたいのだろうか。雫の頭の中はぐちゃぐちゃになってしまいました。

そして、とうとう雫が雨粒になる日がやってきました。ああ、結局僕は何をしよう。周りの雫達が嬉しそうに話すのを聞いた時に、雫の中の不安は大きくなっていました。しかしそんな雫の不安を気にもせず、周りには雫を雲の外へと押し出します。

「さあ、いつてらっしゃい！」

雫は地上に向かって真っ逆さまに落ちていきます。どうしよう、僕はまだ雨になんかなりたくないのに。ああ、僕は何をしたらいいのだろうか。

悩み続ける雫はふと北の国を見ました。北の国で

は長い間雨が降らず、川が枯れ、大地が乾ききっています。人々は嘆き悲しみ、雨を望んでいました。雫は思いました。人々は助けを求めている。これが僕のできることだ。雫は北の国へ向かいました。北の国では雫よりも早く降りた雨粒達が雨を降らしていました。人々は涙を流して喜びます。しかし、すぐに人々は雨で得た水を取り合い始めました。少ない水を求めて人々が争います。雫は悲しくなりました。僕が北の国に降りてもたった一滴じゃ誰も助けられない。それどころか人を傷つけてしまう。それは僕がしたいことじゃない。雫は北の国に降りるのをやめました。

次に雫は西の国に行きました。西の国ではたくさん雨が降っています。雫は思いました。ここにはたくさんの仲間達がいる。みんながいるのだから僕もここに降りよう。そう考えた雫に西の国の人達の声が聞こえます。

「いつもいつも雨ばかりで嫌になる。川だって氾濫す

るし、外にも出られない。早く雨がやんでくれないかな。」

雫は驚きました。みんながやっていることが必ず正しいというわけじゃないんだ。僕がみんなと一緒にだって簡単に決めたことで、人に迷惑をかけてしまう。それは僕のしたいことじゃない。僕にできるのはこの国に降りないことだけだ。雫は西の国と仲間達からそっと離れました。

雫は他の雨粒がない所を探して南の国へ辿りつきました。そこは国のほとんどが海で雨なんかほとんど降りません。雫は思いました。ここだったら誰にも迷惑をかけないはずだ。他の雨粒もほとんどいない。あ、今も一粒だけ雨粒が降りていった。その雨粒はポツと南の国の人へと降りました。しかし、南の国の人には気づかずに歩いていきます。雫は怖くなり消えてしまうのかな。それは嫌だな。でも、僕は何だっ

たらしたいのだろう。何だったらできるのだろう、分らないけれど、誰にも気づかれないのは嫌だ。雫は南の国を後にしました。

最後に残ったのは東の国だけです。そこは雨の日と晴れの日が大体同じくらいある国でした。水が少なすぎることも多すぎることもなく、雨が珍しいものでもありませんでした。しかし、人々は雨の日よりも晴の日の方が好きでした。雫は思いました。この国だったら誰かにたくさん迷惑をかけずに済む。雨と晴れが同じくらいあるのだから僕が降りても大丈夫なはずだ。それにちょうど今、他の雨粒達も降りていって。雫は覚悟を決めて東の国へ降りていきました。地面との距離がどんどん近づいていきます。

「ああ、結局僕は何をしたいのか分からなかったな。そもそもたった一滴の雫にすぎない僕にいったい何ができただろう。」

雫がそう呟いたとき、子どもの声が聞こえてきま

した。

「僕、雨好きだな。雨粒が傘にあたる音を聞くと楽しくなるの。ニツコリしたくなる。」

雫は、はつとしました。今、やっと分かった。それが僕のとしかったことだ。僕にできることだ。雫は自分でも驚くほど心の底からそう思いました。雫は声の方へ必死に向かおうとしましたが、もう地面スレスレの所まできていました。ピチヨン。パラ。パラ。パラ。雫が雨粒となって地上に降りた音は、他のたくさんの音に紛れて消えていきました。

雨が上がってぬかるんだ地面に綺麗な白い花が咲いています。花の名前はレインリリー。雨が降って球根が潤うことで、花茎を伸ばし花を咲かせます。レインリリーの花言葉は、『期待』。太陽がほっと笑っています。星がふふふと微笑みます。美しく育った花達は気持ちよさそうに風に揺れています。それを見て誰かがニツコリ笑いました。

【選考委員特別賞】

いつか会う貴方へ

私立福山暁の星女子中学校 3年

かぶもと みわこ
株本 海環子

ここは科学と魔法の世界「フトウーロ」。この世界には科学の国と魔法の国が古くから隣り合っていましたか

「魔法なんて非科学的なもの信じられるか!」

「フツツ! 貴方たちこそ、鉄と戯れて何がしたいのかしら!」

「何だと!」

と、まあ、このようにとても仲が悪く戦争を繰り返していました。今行われている戦争は一五〇年も前からやっています。

それでも、こんなに戦争をしているのに、決着が着

いたことは一度もありません。戦争が終わる大抵の理由は、両国の王様が戦争に飽きてしまうからです。しかし今行われている戦争は、両国とも今回ばかりは決着をつけようとして一五〇年も続けています。兵士も、

「俺たちいつまでこんなことしてたらいいんだ?」

「知るかよ。今回ばかりは王様が本気だからどっちかが降伏するまでは無理だろうな。」

こんな感じで呆れてしまうレベルです。

しかし、ここ二十年は魔法の国が優勢です。なぜなら魔法の国のとても偉大な魔法使いがどんな傷でも治す魔法「コンソラシヨン」を作り出したからです。この魔法は、魔力を大量に消費する代わりに、どんな大怪我でも治ってしまうのです。この魔法のおかげで魔法の国の兵士は簡単に死ぬことがなくなったのです。

「すごいなこの魔法。俺はこんな高等魔法使えねえ

からお前が羨ましいよ。」

「いや、僕もきついさ。でもこの魔法のおかげで僕等は死なずに済んでいるんだ。」

「くそ、魔法の国の奴等、キリがねえ。噂の『コンソラシヨン』とやらか!。」

しかしそんな劣勢な科学の国にも、とある転機が訪れました。今まで一度も生まれてこなかった天才が生まれたのです。

後にロボット工学の天才と呼ばれるジュニーは科学の国の没落貴族の家に生まれました。料学の国の貴族は皆、優秀な科学者を輩出していましたが、ジュニーの家は祖父の代から優秀な科学者が輩出できなくなり、ジュニーが生まれる頃には没落貴族になっていました。

そんな家に生まれてきたのでジュニーは両親から

優秀な科学者になるように毎日言われ続け、三歳の誕生日、小さく簡単な機械、科学の国では六歳くらいで挑戦するような機械を分解するように言われました。

（これが出来たら、父上と母上に褒めてもらえるはず。僕の頑張りを受けてもらえるはず。誕生日だもん!）

しかし、そんなジュニーの望みも虚しく、分解を終え両親に見せると、

「六分二十四秒。まあまあだな。」

「まあ、でもこれでこの子の実力がわかったわ。このタイムだと明日から色々難しくしてもいいんじゃないの?」

「父上?母上?褒めては下さらないのですか?」

「何を言っているんだ。このレベルで褒められるわけがないだろう。さらに上がいるということがわからないのか?」

「ジュニー？明日からはもっと有意義なお勉強をするのよ。わかった？」

「……はい父上。母上。」

ジュニーは三歳で自分が愛されるために生まれてきたわけではないと理解してしまいました。

次の日からジュニーは一日中部屋に籠もり、勉強をしました。抜き打ちテストの点がフルスコアでなかった時は、夕食を抜きにされることもありました。そして五歳になる頃には、大人も舌を巻く程の器用さと理解能力、知識力になりました。

そしてある日、ジュニーの両親は彼を国家に売ってしまいました。

「なるほど、ジュニー君の器用さと理解能力と知識力は天下一品だ。」

「ええ。家の子のその能力は貴方たちにも劣っていないかと思えます。」

「ねえ、大公様、ジュニーをそちらに引き渡せば、家の

地位は回復するですよねえ？」

「はい奥様。そちらのお子さんはダイヤの原石。それも、とても大きく美しいダイヤの原石。ジュニー君を引き渡してくればそちらの将来は安泰でしょう。」

「あなた……！」

「ああ、もちろん。喜んでお引き渡しいたします。この国のためになるなら。」

「父上？母上？何の話を？」

「ああ、ジュニー。お前がついに人の役に立つ日が来たんだ。」

「え？」

「あなたはこれから国の科学者になるのよ。」

「で、でも、まだ。」

「連れていけ。」

「待つて、まだ、まだ僕は！」

ジュニーはまだ両親に僅かな希望を抱いていたのです。

ジュニーは引き渡されてすぐ、知能テストを受けさせられました。一般人にはかなり難しいテストです。

（このテストは我々なら簡単に解けるが見るからにただのガキだぞ。まあ解けても三割程といったところだろうな……）

しかしジュニーは科学者たちが思うよりも天才だった。

（何!? フルスコアだとーまだ五歳のガキだぞ!?）

「ジュ、ジュニー君は随分賢いんだね。」

「勉強はしてるので。」

「そ、そうなんだ。」

ジュニーの天才っぷりは瞬く間に国中に知れ渡り「奇跡の天才」として一躍有名になった。

しかし、国民の抱く期待や憧れとは裏腹に、彼の生活はひどく孤独なものでした。

専門的な知識を固める勉強。一人での質素な食

事。午前の勉強の成果を試すテスト。たまに実践。これがジュニーの一日の生活。友達と遊んだことも、親と食事をつたことがない。彼等もジュニーに一切の自由を許しませんでした。

（ここでの生活も、あそこと大して変わらない。本当に僕は立派な科学者になれるんだろうか……）

そんな生活が五年続いたある日、十歳になったジュニーは大人達の研究に混ざるようになりました。家電から新兵器にかけて、様々な開発に携わりました。

十五歳になる頃、ジュニーは、とある兵器の開発を任されました。それは今の戦争の状況を変えることがあるかもしれない、「コンソラシヨン」と同等の影響を及ぼす、ロボット兵器の開発でした。

ジュニーは与えられた研究所「アンラーゲ」に籠り、試作を作りまくりました。様々な見た目のロボットを作りましたが、性能はどれも同じで、魔力を検知すれば自動的に攻撃し、逆に攻撃されても、コアが壊

されるまで止まらない。コアが破壊されたら大爆発を起こし、遠隔操作も可能といった生身の人間にはできないこと成しとげてくれるものでした。

ジュニーの作ったロボットは戦争に大きく貢献し、三十八年ぶりに戦争の均衡は安定しました。

それから二年、ジュニーの研究所にはロボットが一体追加されていました。このロボットはジュニーが三年前に開発したロボットの新型です。あのロボットたちは「ノイ01」と名付けられ、今日も戦争に出ています。こちらは家庭用のお手伝いロボット「ノイ02」。ジュニーの研究所にいる個体は助手として仕えていてジュニーから、「アルメヒティヒ」という名前を貰っています。

「おはようアル。今の時間と天気と気温は？」

「おはようございます主様。只今の時刻は午前六時四十二分。天気は晴れの十九℃です。」

「ありがとう。朝食にするよ、おいでノイギア」

「アンツ！」

ノイギアは犬型ロボットでまだ試作段階のため、様子見としてペットとして飼っているものです。

（今日はノイ01の大量注文が入っているからまた作らなくては。今日は何時間寝れるかな……）

そんなことを考えている時、

「きゃあああ〜〜〜」

まだ朝の七時だというのに誰かの悲鳴が聞こえてきました。

「魔力を検知しました。」

「ウヴ！」

「近所迷惑な奴は、魔法の国の者だということか？」

「先程の方は女性で研究所の南口の方に倒れてます。どうしますか？」

「どうしますか？……でも騒ぎになるのは目に見えてる。面倒事はごめんだ。」

「承知致しました。では彼女を、客室に運んでおきま

すね。」

「ああ、頼んだ。」

ジュニーは彼女をアルメヒティヒに任せ、ラボに向かいました。ノイギアは魔力を検知すると攻撃するようになっていたのでそれを変更するためです。

ノイギアのメンテナンスが終わり、ジュニーはアルメヒティヒの元に向かいました。

「どうだ？」

「脈は安定していて、呼吸は正常です。」

「そうか、起きたら教えてくれ。」

「承知致しました。」

「じゃあよろしく頼む。」

ジュニーが部屋を出ようとしたその時、

「うわあああ!! はあはあ、ここは?」

「はじめまして。」

「きゃあーロボット!」

「ここは、科学の国の科学者、ジュニー様の研究所で

ございます。」

「嘘! 私本当に科学の国に!」

「ああそうだよ。朝っぱらから大声上げて、近所迷惑だ。」

「あら? あなたがジュニー? 助けてくれてありがとう! 私ハムール。魔法の国出身よ。」

ハムールは腕をばつと広げました。

「?ハグよ、魔法の国では感謝や親愛を示す時にハグをするの。」

「生憎俺はハグはしたことがないんだ。元気になったんなら、とつと国に帰りな。」

親に愛されたことのないジュニーはハグをしたことがありませんでした。

（見たことはあるからきつとこの国にもハグの文化はあるだろう。あいづらはしてくれなかったけどな。）

「ねえ、ジュニー。貴方、人から愛されたことがないの

ね。」

「……何だよ、さっさと国に帰れって言ってんだろ。」

「私ね、生まれつき人の心が読めるの。魔法の国にはたまに私みたいな人が生まれてくるんだって。それでね、この前、このことで村の長であるお婆様と喧嘩して、家出してきたの。」

「だからここに來たっていうのか？お前の故郷以外の村で暮らすとかないのか？」

「国中のほとんどの人は私の噂を聞いたことがあるから無理なの。わざわざ掟を破ってまでこの国に來たのは、少しは自由になれると思ったけど、この国の監視カメラ、魔力を検知するのね。」

この国の監視カメラもジュニーが作ったものでした。

「はあ、そうか、仕方ない。気がすむまでここにいろ、でも早く帰れよ。それまでだからな。」

「本当！ありがとう！じゃあお返しに、私が愛を教えてあげる！」

「はあ！？」

（アムールがここに来てから一週間が経ったが何もしてなくないか？）

アムールはジュニーにあんなことを言った日から一緒に食事をしたり、他愛のない話ばかりしていました。しかしそれでもジュニーの心には変化があったのです。（他の奴等にアムールの存在がバレるのは時間の問題だ。魔力を抑える物でも作ってやるか。）

人のために自らが動けるようになったのです。誰からの命令でもなく、自分で誰かのために動く。これはアムールのおかけて、できるようになったことです。

それから二週間が経った頃、

「アムール、これをやる。」

「何これ？」

「魔力を抑え込むブレスレットだ。これを着ければこの国の人間とまったく同じになれる。」

「本当に！？ありがとう！じゃあ明日、一緒に出かけ

よう！」

「唐突だな……まあ明日の仕事は入ってないからな、休むか。」

「やったあ！」

アムールの魔力を抑えてからアムールはジュニーと一緒に出かけようになりました。

「ねえジュニー、楽しい？」

「楽しいかどうかはわからないが、心が温かい気がする。まだここにいたいと思えてくる。」

「よかった。それが楽しいと好きって気持ちよ。」

「そうか、心が温かくなるのか。」

ジュニーは少しずつ人間らしくなっていました。

（アムールが来てから人生に色がついた気がする。心が温かくなるようになったな……。）

ジュニーはアムールと暮らすことで人の温かさと愛に触れていたのです。

（特にアムールと一緒にいる時に心が温まってドキド

キするんだよな。まさか……。）

アムールが研究所に来てから二カ月が経った頃、アムールはため息をつくことが多くなりました。

「アル、最近アムールはどうしたんだ？」

「寝不足ぎみとストレスの影響の可能性があります。」

「そうか、俺からも聞いてみるよ、ありがとう。」

「いえ。」

「アムール。」

「……あ、ああジュニー何か用？」

「何か困っているのか？最近暗い顔ばかりしているよのだが。」

「……私、国に帰ろうかと思うの。貴方も、大分人らしい感情を持ったわ。これ以上貴方に迷惑はかけられないし、明日には荷物をまとめておくから、だから。」

「待ってくれ、俺はお前と一緒にいて迷惑だなんて思

ってない。たしかに最初は変な奴だとは思った。けど、お前のおかげで俺は人らしくなれたし、それに俺はきつとお前のことが好きだ。今お前が目の前から消えたら俺は何も出来なくなる気がするし、きつととても心が暗くなる。それくらい好きなんだ。」

「ジュニー……ありがとう。とっても嬉しいわ。私も貴方のこと、好きよ。でも、世界はこれを許してはくれない、この戦争が終わらない限り私はこれ以上ここにいることはできないの。」

「そうか……じゃあ俺が戦争を終わらせる。五年、否三年待ってくれ、それまでに戦争が終わったらまたここにきてくれ。」

「フツツわかった約束よ。」

「約束だ。」

二人は最後に指切りをし、アムールは国に帰りました。

あの約束から二年後、ジュニーは戦争を終わらせるために尽力していました。魔法の国の人にも効果のある嘘発見機を発明し、外交に役立たせたり、兵士を傷付けず捕縛するための装置を発明しました。

そんなある日、科学の国の王が病で倒れ、亡くなってしまいました。次の王となった長男は戦争に飽き飽きしていました。そんな新しい王の噂を聞いたジュニーは戦争を終わらせるために、王へ魔法の国と互いを認め協力し合う仲にしようと進言しました。国で一番の科学者として王族からの信頼も厚かったジュニーの言葉は採用され、魔法の国との会談が設けられました。戦争が始まってから初の両国王の会談に両国民は固唾を飲み込みました。

計十二回の会談を経て、両国は和平協定を結びました。あの約束から二年と十一カ月が経った頃でした。

(遂に、遂に戦争が終わった。両国間が自由に行き来

できるようになるまで二カ月もかからないだろう。
後少し、後少し待つだけ。」

（やっと戦争が終わったわ。きっとジュニーが頑張ったのね。彼に話したいことが沢山あるわ！）

ジュニーもアムールも喜びを胸に、会える日を待ち焦がれました。

和平協定が結ばれてから二ヶ月。遂に両国間が自由に行き来出来るようになりました。ジュニーは今か今かと待ちましたが、三日経ってもアムールは現れませんでした。

（あれから二年も経ったんだ。向こうで好きな人ができてもおかしくないよな……。）

ジュニーが会えることに諦めかけたその時、

「きゃあああぁー!!」

「!!」

「魔力を検知しました。」

「ワン!!」

どこかで聞いたことのある叫び声が聞こえてきました。

「まさか!」

ジュニーが急いで南口に向かうと、

「いてて、まあでもけがは無いわ!」

「アムール!」

「ジュニー!! 久しぶりね! あなたまったく変わってないように安心したわ!」

「お前もな。」

二年前と同じ現れ方でアムールがいました。

「お前に話したいことが沢山あるんだ。」

「私も沢山あるわ!」

「でも言わなきゃいけないことが一つある。」

「何?」

「俺と、結婚してくれ!」

「勿論!!」

その後、科学の国と魔法の国は二度と戦争をしなくなり平和な世界が訪れました。ジュニーとアムールも結婚し生涯幸せな人生を送りました。

【選考委員特別賞】

輝く希望を夢見て

私立福山暁の星女子中学校 3年

よしまつりのあ
吉松 莉乃愛

「おばちゃん、私をひとりぼっちにさせないで。私のことをいつまでも見守ってくれるって言ったのに。寂しいよ。私、これからどうしたらいいの。」

私の願いは、無念にもおばの病気を治すことはできなかつた。どんなに月日が経っても、答えのでない切なさや悲しさを抱えている。どうしたら、溢れてくる涙をとめることができるのだろうか。おばのことを考えると、胸がとても痛かつた。

私の名前は、夏凜でかりん。私には、かけがえのないおばがいる。おばには、子供がいないので、私のことを子供の様に愛情いっぱいに育ててくれた。私は、幼

い頃に両親を亡くし兄弟もいない。そんな私を、おばはいつも温かいまなざしで包んでくれていた。だから、一ミリたりとも寂しさを感じなかつた。

人生の終わりが近づくことを悟った時、人はどんな感情になるだろうか。悲しさと絶望で、涙が溢れて、苦しくなるだろう。そして、どうして自分が病氣になったのだろうと悔やむだろう。信じがたい真実を目の前に、逃げだしたくなるのではないか…。

たった一人のおばの病気を知った時、私はまだ中学生だった。真冬の寒さが心に刺さる季節、普通と変わらない日常生活から一変真つ黒な灯りもないトンネルの中に送り込まれたように思えた。医者から言われた言葉は、

「末期の脾臓癌です。手術で取り除くことは不可能です。」

その病名は、信じがたい真実だった。私は、力強くおばの手を握った。おばの手は、氷の様に冷たくて、

顔は海のように青ざめていた。私は、洪水のように涙が溢れていた。おばの瞳は、ダムの水が日照りて無くなったように一滴も涙を流さず、落胆し言葉を失っていた。もしかしたら、おばは、なんとなく自分の異変に気づいていたのではないか。孤独な日々の中で、不安な涙を流していたのではないか。

病院の中庭のベンチに、やっとの思いでたどり着いた時、全身から魂は抜けてしまっていた。身体に力が入らず、うまく座れなかった。どのくらい時間が経ったのだろうか。年前中に、病院に行つてからの記憶が、うつすらとしか思い出せなくなっていた。夕方、五時を知らせる音楽が何度もこだまして鳴り響いていた。心配して、近くに住んでいる親戚のお姉さんが迎えに来てくれた。言葉の代わりに、お姉さんはおばと私を力強く抱きしめてくれた。今日から、親戚のお姉さんとおばと私は三人で過ごすことになった。

人生の残り時間を何をしておばと過ごすのか。私

は、おばに何ができるのだろうか。宣告された日から、おばのことで頭がいっぱいになっていた。何度も自分に問いかけても、答えは見つからなかった。そして、夜になると切ない気持ちさがこみあげてきて、おばの夢を見るようになった。

私とおばには、共通する趣味があった。それは、邦楽を演奏することである。舞台で、箏や三味線の演奏と一緒にすることを楽しみにしていた。おばの身体は、あちこちに癌が転移していて、演奏するパワーなんてないはずなのに、着物を着て演奏する姿は生き生きとしていた。皆が、目を疑うような光景がそこにあつたのだ。どういうことだろう。舞台上で演奏するおばの姿をよく見ると、楽器が自ら音を響かせていたのだ。おばの身体の周辺は、光り輝いていた。おばの信念が楽器を動かしているように思えた。おばの演奏する姿を見て、共演者達は癌は完治したのではないかと口々に言っていた。私にしか真実は見えてい

なかった。他の人には、おばが演奏しているように見えたようだった。どうしてこんな不思議なことが起こったのだろうか。おばは、本当に完治したのではないかと奇跡を願った。おばの演奏は、熱意があり愛がこもった優しい音色だった。客席の拍手を背に、おばは、満面の笑みで私に

「うまく弾けたでしょう。」

と誇らしい表情で私に声をかけた。

「最高だったよ。」

と返事を返すのが精一杯だった。

「夏凜ちゃん、朝よ、起きて。学校に達刻するわよ。」

親戚のお姉さんの声で目が覚めた。さっきのは、夢だったのか。現実にかけてほしい希望を夢見て、夢の中に出てきたのかな。なんだか夢であつたことが、受けとめられずに悲しい気持ちがかみあげてきて、涙が流れた。

お正月の邦楽の演奏会には、おばは聴きに来るこ

ともできないくらい体力がなく、弱っていた。本当なら、おばと合奏するはずだった曲を、心細さを感じながら演奏した。もう一緒に演奏することは不可能なのか。もう一度、光り輝く舞台上で演奏するおばの姿を見たかった。おばの願いを叶えてあげたかった。

私は日々学校のことを話したり、綺麗な風景を写真や動画で撮って、病室のおばに見せたりした。私の全ての時間を、おばと共に過ごすことに使おうと強く決っていた。私が会いに行くたびに、おばは嬉しそうにしてくれるが、本心から喜んでくれないのに気付いた。瞳が悲しさをうつしていた。どうしてだろう。自分がしてほしいことをしているつもりだけど、本当は心の負担になっていたのかな。私は、おばが悩んでいるように思えた。きっとおばは、自分が病気になる事実と今は必死に向き合っているのだろう。だから、うまく感情をコントロールできないのだろうと勝手に判断していた。

鳥の囀りと共にやってくる温かい春の季節。どんなことも良い方向に変えてくれるのではないかと期待してしまふ季節。おばの誕生日は、四月五日だ。その日は、私は朝からケーキ作りに取りかかった。いつもは、誕生日の日は学校の研修があつてなかなか一緒に過ごせなかったけれど、今年は日曜日で学校も休みだし、特別な誕生会にしたいくて、準備に気合いが入っていた。おばに知られないようにこっそりと、サプライズしたかったのだ。親戚のお姉さんが、おばの一時帰宅に寄り添ってくれていた。

「ガチャ。」

ドアが開く音、おばは車椅子に座っていた。

「お誕生日おめでとう。」

おばの耳元でそっとささやいてみた。おばは、驚きとともに、満面の笑みで喜んでくれた。そこに、電話の音。友達からの電話だった。おばには、台所の台の上に手作りケーキがあることと、写真を撮ろうねと

伝えていた。数分の電話が終わり台所に戻ってくると、あつたはずのケーキは、形を変えていた。丸いケーキは、八等分に切っており、残っていたのは七等分のケーキだった。おばの口のまわりに生クリームがついていた。

「え？まだ、写真撮ってないよ。なんて、ホールのケーキを切ってしまったの。」

私は、呆氣にとられてしまった。その様子を見ておばは、

「夏凜ちゃんの手作りのケーキは、とてもおいしかったよ。でもね、ケーキにろうそくをつけて、おめでとうと言われて祝ってもらうのは、慣れなくて恥ずかしいのよ。いつもは、手作りのホールのケーキではなく、買ってきたショートケーキだったでしょう。夏凜ちゃんの気持ちは、ありがたいけれど、特別な誕生日会はしなくてもいいのよ。いつもと同じ、普通にしてほしい。」

悪気なく言っているおばのことを憎むことはできないけれど、私は今年は特別な盛大な誕生日会にできなかった。来年は、一緒にいられないことが分かっていたから余計に、ピアノを弾いて歌って、ろうそくの火を消してもらいたかった。それだけなのに、叶えることができなかった悲しさが込み上げていた。どうしてこんなことになってしまったのだろう。友達の電話に出ってしまった自分に腹が立った。おばは、大きく深呼吸をし、自分の気持ちを一つひとつ丁寧に言葉にした。

「生きていく上で最も大切なことは何か分かる？」

おばは、ゆっくりと噛み締める口調で私に問いかけた。

「お金かな。」

お金がないと何もできないし、何も挑戦できないし、現実的に考えてお金ではないかと自信をもって答えた。しかし、予想もしなかった返答がおばから返

ってきた。

「人それぞれ価値観や受け止め方は違うと思うけれど、人生においてお金よりも大事にしていかなきゃいけないのは時間なのよ。時間をうまく使えている人には、チャンスがやってくるし、それを応援してくれる人も集まってくると思うの。だから、私が病気になる前のように自分のために自分の大切な時間を使っ
てほしいのよ。今まで通り変わらない毎日で、特別な日は私にとって必要のないのよ。優先順位は、常に自分に使う時間にしてほしいの。理解してくれる？死は、とても怖いし悲しいけれど、年功序列で年をとったものから順に亡くなるものなの。病気になって、亡くなる日がはやまっただけなの。私がずっと生きていたら、夏凜ちゃんの時代にはならないでしょう。だから、死を受け入れるしかないのよ。仕方ない。仕方ない。仕方ない。」

おばは、遠くを見つめて覚悟を決めた表情を浮か

べていた。私の頬を一筋の熱いものが流れた。おばに知られないように、背を向けて溢れる涙を止めようと必死だった。一番辛いのはおばなのに、私の弱さのせいで涙がとめることはできなかった。

「トン、トン、トン」

軽やかに階段を降りてくるお姉さん。洗濯物を畳んで持ってきてくれた。お姉さんは、おばの誕生日を知らない。三人で切ってしまった普通のケーキを食べた。いつもと変わらないおやつ時間を過ごした。

その日の夜、おばから言われた言葉について考え込んだ。普通にするって何？時間は大切なことは分かっているけれど、残りわずかなおばと過ごす時間に使ってはいけないの？何度自分に問いかけても、納得できなかった。でも、一つだけ分かったことがある。それは、自分がしてほしいこと、良いと思った言動は必ずしも他の人にとって一致しないということだ。それぞれに望んでいるものが違っていて、受け止め方や表

現の仕方が違うのは、自然なことかもしれないと思った。もしかしたら、私が頑張つて成果を見せることが、おばの生きるパワーになるのかもしれないと予想した。私は目の前のことについていいになっていたけれど、おばは私の未来を大切に考えての発言をしてくれたのではないか。そう思うと、おばの偉大さと優しさを改めて感じる事ができた。

おばは、演奏会のために練習を重ねていたが、もうパワーはなく、おばの周りに光輝くオーラは消えてしまっていた。時々、体調の良い時にだけしていた練習さえも出来なくなってしまった。演奏できなくても、体が痛くても楽器のメンテナンスを欠かさずしていた後ろ姿を見るたびに、楽器に対する愛情を感じていた。私は、おばのやるせない気持ちが伝わり、涙が溢れた。おばには見つからないように、一人で泣く日々が続いた。私の横には、おばがメンテナンスをした箏と三味線が静かに寄り添ってくれていた。

宣告を受けてから、約一年が経とうとしている。おばは、持病の目の病気が進行しているのかよく転ぶようになった。私が学校に行っている間は、何も起こらないでほしいと願う日が多くなった。何もできない悔しさと、現実を受け止められない悲しきで、普通を振る舞うためには演技をしなければ身がもたなかった。私にできる唯一のことは、毎日神社にお参りに行っておばのことを願うことだった。自己満足に過ぎなかったが、1%の奇跡を信じたかったのだ。

「神様、どうか私からおばを奪わないで。私が出れることは、全て全力で取り組み頑張ります。」

毎日、おばのことを思って神様をお願いをした。おばは、弱っていくき辛くて涙を流すようになった。この世界に奇跡があるなら、今起こしてほしいと空を見上げて強く願った。

ある日、おばは家のわずかな段差で転んでしまい腰の骨を折ってしまった。歩くことさえ、神様は奪っ

てしまったのだ。病院に入院することになってしまった。リハビリができる状態ではないおばは、誰とも会わなくなってしまった。老いていく自分を見せたくないのだらう。今、おばが望むことは私が頑張っている姿なのではないかと思った。私は、成果を出すために、学校のテストや行事に対して全力で向き合った。そして、その結果を胸にお見舞いに行くことにした。嬉しい報告をしてもおばは、

「病院に來ている暇があつたら、次の戦略を考えなきや。トップを維持していくことは、並大抵の努力ではできないことだから、維持するために継続できる環境にいなきやだめよ。夏凜ちゃんが頑張っていることが、何よりも薬になるのよ。夏凜ちゃんは、おばちゃんの誇りなのよ。」

と私に力強く言った。その後の会話は、何を言っているか聞きとれなかった。私のことを思って全身の体力を使って助言してくれたのだ。おばの言葉は私のこと

を愛してくれた大事な言葉だった。きつとおばが病気になるってなかったら私達はここまで本音で、向き合えていなかっただろう。相手の事を理解して行動することは思っているよりも難しいと感じた。

雨が強く降る夜遅く、病院からの電話が鳴った。私は、夢であってほしいと恐る恐る電話にでた。

「危篤状態です。すぐに病院にいらして下さい。」

すごく動揺して手が震えた。現実だと信じたくなかった。全身が、ガタガタと音が鳴っているのが分かった。二階で寝ていたお姉さんにも、病院から電話があったように足音が近づいてくるのを感じた。その音を聞いて、現実なのかと気が抜けた。

夜の道は行き交う車が一台もなかった。車のワイパーの音が、静けさの中で心臓の音のように一定のリズムを刻んでいた。いつも、冷静なお姉さんの瞳から大粒の涙がこぼれ落ちていた。分かっていた現実なのに、ついにその日が来ると、夢であってほしいと強く

願っていた。時を止まってほしい。せめて私達が病室にたどりつくまで、おばが話せる状況でいてほしい。

静まりかえった病室で待っていたのは、変わり果てたおばの姿だった。息は微かにしている感じで、酸素マスクをつけて喋ることさえもできなくなっていました。何か声をかけたくても言葉が見つからない。石のように全身が硬直し、口はボンドが貼りついてしまったかの様に開けることが出来なかった。おばの頬に私の手をあてて、頑張れと心の中で唱えた。私の心の声が、おばに聞こえたのか微かに笑っているように見えた。頑張って病気に向き合っているおばに、なんと声をかけたらよいのだろうか。もう十分に頑張っているのが伝わってくるのに、これ以上頑張れとは言えない。ありがとうと言えば、本当に最後のお別れになってしまいうし、最後までかけてあげる言葉は見つからなかった。

「耳は聞こえているから、話しかけてあげてほしい。」

と病院の先生に言われても、自分が泣いてしまうのを堪えるのに必死で何もできなかった。こんな時、おばは何を求めるのだろうか。私は、

「おばちゃん！」

と呼んであげるのが精一杯だった。自分の不甲斐なさが情けなかった。脈がだんだんと弱くなっていくのがそばで感じることができた。眠るように、天国にいつてしまったおばの人生は幸せな人生だっただろうか。自分に素直になれなくて、後悔していなかっただろうか。限られた時間の中で伝えたかったことを全て言えただろうか。本当は、海外旅行に行ったり、一緒に映画をみて買い物をしたり、特別な毎日を過ごしたかったのではないか。何も言えなくなったおばの無念さを前に、おばの気持ちを考えていた。

おばは、自分が思っているあたり前の事が時には、相手にとって違うということに気付かせてくれた。そして、生きていく上で何より大事なものは時間である

ことを教えてくれた。おばは、最後まで輝く希望をもっていた。そんなおばの命は、宝石のように輝いていた。

「きっと、本当に心が折れる時は、辛い時よりも、希望を失った時なのかもしれない。」

私は、お姉さんに呟いていた。お姉さんは、

「夏凛ちゃんが存在が、おばちゃんの生きる希望だったのよ。」

と涙ぐんだ声で言ってくれた。

お葬式の日、私はおばの愛した箏で、おばを見送るために演奏した。手が震えるのを必死で抑えながらおばが大好きだった曲を弾いた。涙でかすんで見える自分の手と、おばの手が重なり合うのを感じた。演奏が終わった後おばの顔をのぞくと、ありがとうと微笑んでいるように見えた。

私は、おばの分まで、生きて輝く夢を掴んで前に前進していく希望を持ち続けたいと思う。形はなく

なっても、おばとの思い出が私の心をしっかりと支えてくれている。おばのことを考えると寂しくて泣く日々が続くだろう。でも、死はみんなにいずれ訪れることで自然な流れなのだ。理解していても、自分の大切な人だけはいつまでも生き続けてほしいと願ってしまう。おばが残した言葉をこれからの私の生きる糧にしたいと思った。何にでも挑戦して後悔のない日々を送ろうと思う。

さあ、今日は何にチャレンジしようかな。

「私が頑張ることは、おばの希望の光。公子おばちゃん、いつまでも私の事を見守っていてね。大好きです。」

その瞬間、綺麗な蝶が私のまわりにきて、風と共に流れる箏の音を届けてくれた。

【久留島武彦記念館館長特別賞】

化け狐のきつちゃん

私立福山暁の星女子中学校 3年

きつたか あかね
橘高 茜音

これは狐の女の子が人間の世界へ飛び出す物語。

私は狐のきつちゃん。今日から人間の学校へ行く！

あ、もちろん人間の姿でね。結構不安だけどこの日のために、お母さんから人間に化ける方法を教えてもらって練習したから大丈夫だと思う。てか思いたい。元々活発な方じゃないからなく私。本当に大丈夫かな？でもそんな自分を変えたいと思って来たんだし、今更引き返せないし、頑張るしかない！緊張するな。絶対バレちゃいけないから、しっかりしなきゃ！

く入学式く

わあ人間の匂いがすごいするな。鼻があんまりよ

くない私でも分かるくらい。けどまだ余裕だね。案外いけるかも。

く数分後く

人間の話は長いって聞いたけど、本当に長いな。

肩もお尻も痛いな。

く教室く

さてと。ここからが問題だな。友達できるかな。早

く人間と喋りたいけどそんな勇氣まだないな。あ、そういえばお母さんが、

「人間はねじつくり観察するの。そうしてその人間の性格を知っている人、悪い人を見極めるのよ。」

って言ってたな。よし観察しよう。怪しまれない程度に。しかし、今日は入学して初日だから授業がなくて楽だな。先生も面白そうな人間だし、ちよろっと観察するだけで人間関係という物が見えてきた。人間とは分かりやすい生物だな。そろそろ話せそうな人間を見つけて話しかけてみるか。まあ無難に隣の席

の人間だな。私の左隣の人間は、身長が高くて静か
そうな人間だ。とりあえずまずは

「一年間よろしくね!」

と完璧!練習の成果が出てる。

「こちらこそよろしく!」

初めて会話が出来た。嬉しい!次はどの人間に話
しかけよう?まだ二人でいる人間には話しかけづら
いな。よし後ろの席の人間にしよう、確か後ろの席の
人間は自己紹介の時私が人間界のことを勉強した
時に出てきたゲームが好きと言っていたな。そのこと
について話してみるか。

「一年間よろしくね!」

「よろしく!」

人間は思っていたより優しい。笑顔で返事をしてく
れる。気が緩んで耳が出そう。

「そういえばさっきこのゲームが好きって言ったよ
ね。私も大好きなんだ!」

「え!そうなの!?このゲーム結構知らない『人』が
多いから知ってる『人』がいて嬉しい!」

『人』だって!うまくいってる。

それから教室内の学級委員や係決めをした。私
は学習係というのになったが正直どうすればいいか
分からないけどさっき喋った人間もいるから一緒にい
よう。

くお昼ご飯く

あくお腹すいた。もう死にそう。ん?みんな集まっ
て食べようとしている。いいなり。私も集まって食べ
たい!どうしようさっきの二人を誘いたい。でもなく断
られたらなく。あくもういいや誘おう!

「ねえねえ二人とも!一緒にご飯食べようよ!」

「うん!いいよ!」

「私も二人を誘おうと思ってた!」

やった!おっと危ない。嬉しすぎてガツポーズする
ところだった。

く掃除時間く

人間界でも掃除はとても面倒だな。けど毎日しないと汚くなるのはそれはそれで面倒だ仕方ないやらか。

「ねえねえきつちゃん!」

「はい?!」

人間の方から話しかけてくれた!! えっと確かこの人間は、私の左斜め後ろの席の人間だったな。びっくりして声が裏返っちゃった。恥ずかしい。

「急に話しかけてごめんね。びっくりしたよね。あ! 私のことはおつちゃんと呼んでね! そんなことよりさっきうつちゃんとこつちゃんとゲームの話してたよね。私もあのゲーム好きなんだ!」

おおすごいマシングントークの人間だな。このおつちゃんという人間が言っているうつちゃんとこつちゃんとは、私が一番最初に話をした左隣の人間と後ろの席の人間だ。おつちゃんはフレンドリーだな。

「全然大丈夫だよ。それじゃあみんなで放課後話そうよ!」

「うん!」

やっぱ。生まれて初めて人間と約束しちゃった。嬉しすぎてしっぱが出そう。

く放課後く

「でね。これがこうでこうなっここが難しいんだよね。」

「分かる。私もそこ出来ない。」

「私も。」

「あ!ここはこれをこうしたら簡単に出来るよ!」

ナイス私!ちゃんと勉強してきた甲斐があった。

「え!ほんとに?!家に帰ったらすぐやってみる!」

「ありがとう!」

みんな喜んでくれた!嬉しい!

く家く

「めっちゃ楽しかったし人間は意外と優しくて一緒に

いたら時間が経つの早く感じるよ!」

「そう。それはよかったわね。安心したわ。でもくれぐれも狐だつてバレないように気をつけなさいよ?」

「はい。」

と今日の出来事をお母さんに話した。これからもしみだな。

しかし事件は突然起きた。

〜三カ月後〜

あゝ今日も今日とて授業は眠いな。そうだ!ちよつとだけ寝ても大丈夫だよ。どうせあと五分で終わるし。寝ちゃえ!

「おーい。おーい。大丈夫?」

ん?あれ私寝てた?

「えつと耳としっぽが出てるけど大丈夫?今は私たちしかいないけど、一応隠しといたほうがいいんじゃない?」

え、ん?耳としっぽ?嘘。最悪。どうしよう逃げ

る?逃げるしかないよね。お母さんにも

「もしも狐だつてバレたらすぐ逃げるのよ。分かったわね?」

つて言われたし。でもせっかく仲良くなれたのに…。

「ごめん。実は私、狐なんだ。みんなを騙しててごめん。怖いよね?」

「いやいやいや!そんなことないよ!だって私うさぎだし!」

え?おっちゃんがうさぎ?

「私はイノシシだよ?」

こっちゃんがイノシシ??

「私はね!猫なんだ!」

うっちゃんが猫???

「ええええええつ。そうだったの???確かに耳としっぽを見ても驚いてないなとは思ってたけど。えーまじか。」

「いやゝなんか肩の荷が降りた感じで楽だね。」

「だね。」

すごい偶然だな。これはお母さんに言わないと。

～家～

「ねえ聞いて！私がずっと一緒にいた人間達、ほんとは人間じゃなくてね。猫とイノシシとうさぎだったんだよ！」

「あゝ知ってるわよ。」

「え？なんて？」

「だってあんたの体から人間の匂いもだけど他の動物の匂いにするし。」

「へへそうだったんだ。流石です。お母さん。」

「あんたはまだまだね。」

はあまさかの出来事だったけど学校生活は大丈夫そうだし、話す話題が増えたと思えば良いや。

～事件から一ヶ月後～

随分学校生活にも慣れてきて最近新しい友達ができた。えゝつと、しっちゃんは。あ、いた。

しっちゃんは運動神経がめっちゃいい。

「今日の体育でも大活躍だったね。流石しっちゃん！」

「そう？まだまだ本気じゃないし、軽くやってるほうだよ？」

わおすげえ。私にはそんな体力はないな。しっちゃんは頭もいいから完璧なんだよな。最初はちよっと近寄りたいたい雰囲気だったけど、とっても優しいしなんせめっちゃ面白い人間だ。

そういえば、しっちゃんは私の他に二人の人間とよく喋っているな。私もその二人と話してみたい！確かな前はまっちゃんと言っていたか。ちよつと今二人と席近しい話せる時に話しかけてみるか。

～次の授業～

「はい。では、グループになってください。」

お！ナイスタイミング先生！

「ねえねえ昨日のこれ見た？」

「見た。見た。面白かったよね。」

あ！今だ。

「私も見たーめっちゃ笑った!」

「分かる!」

よしよし会話できてる。

「あとね。これも見た!」

「これいいよね。全シリーズ見てる!」

「私も。」

優しいな。本当に。ニコニコで会話してくれるし、な

んか安心できる空気感。

しかしまた事件が起きた。

〜七時間目プール〜

七時間目にプールとかまじかよ。てか私、泳げない

し。

「はあ、ねえねえまっちゃんとやっちゃんとしっちゃんっ

て泳げる?」

「いや〜泳げんよ。だって私。パンダだし。」

ん?なんて?

「私も泳げんよ。だって犬だし。犬だからって泳げる

と思わないでよね。」

「私はクマだから当然泳げるで。」

ん?パンダ?犬?クマ?

「ええええええええええ」

「え。そんな驚く? 私たちはきっちゃん狐って入学

式の時に気づいてたよ?」

「うん!」

「うん。」

「え?なんで?どうして分かったの?」

「えつとね。匂い!」

「私も匂いかな。」

「私はなんとなく雰囲気でぼいなって思ってた二人に言

って見たらそうだったのな?」

そーだったんだ。えつ。てことは。

「うっちゃんとかっちゃんとおっちゃんのことも?」

「うん!知ってるよ。」

「その三人も私たちのこと知ってるしね。」

わお私だけ知らなかったのね。なぜ言ってくれなかったのか。まあいっか。

「そりやすごいね。じゃあもう七人？七匹？どっちでもいいけどみんなで一緒に話そうよ！多い方が楽しいし！」

「うん！」

「そうだね。」

「いいね！」

こうしてまさかの私が話しかけた人間はみんな人間に化けている動物だった。これが「類は友を呼ぶ」というやつなのか。もちろんその子たちだけが動物で後の子達は正真正銘、人間だ。こんなことがあるのか。正直びっくりしすぎているがなんだかんだ楽しいからいいや。これから卒業するまで、いろんなことが起こるんだろうな。ワクワクしちゃう。人間の学校に来てよかった！

これは狐の女の子が人間の世界へ飛び出す物語。

君の近くにも、もしかしたら人間に化けた動物がいるかもね。

【読売新聞社賞】

めぐり逢いは再び

私立福山暁の星女子中学校 3年

平川 里彩
ひらかわ りさ

昔々、ある森に心優しい狼のリアムが住んでいました。リアムは穏やかな性格で、本が大好きな狼です。しかし、リアムの姿に対する偏見が、森に住む他の動物たちを怖がらせていました。特に、大きな体と鋭い爪、目つきから、みんなから怖い狼と決めつけられていました。森には、様々な動物が住んでいます。その中でも、ウサギは小さな体に可愛らしい見ためから、様々な動物に可愛がられています。リアムは、そんなウサギのことを羨ましそうにいつも眺めています。

森には、フクロウのルークさんが本屋を開いている場所があります。リアムのお気に入りの場所です。た

くさんの種類の本があり、その中でも、物語の本がリアムは大好きです。今日もリアムは、この本屋で物語を読んでいます。すると、どこからか視線を感じました。

「んっ?」

辺りを見渡すと、小さいウサギがこちらを不思議そうに見つめています。いつも、怖がられているリアムはどう話しかけたらいいのか迷いました。

「何の本を読んでいるの?」

ウサギに話しかけられて、リアムはとても驚きました。森に住んでいる他の動物とは、あまり話していることがなかったのです。

「えっ。僕に話しかけてるの?」

「そうよ。あつ、ごめんなさい。まずは、自己紹介しなきゃよね。私はリリー、今日この森に引っ越してきたの。あなたの名前は?」

「僕はリアム。」

「そう。あなた、リアムっていうのね。リアム、よろしくね。」

「うん、よろしく。」

びつくりしている反面、初めて話しかけられて、リアムは嬉しそうです。

「何の本を読んでいるの？」

「これは、オオカミ探偵という本だよ。この本は、主人公の狼が探偵で事件の謎を解く話だよ。」

「面白そうね。私も読んでみたいな。」

「本当？え、えっと、この本は狼が主人公だから嬉しくて、狼っていつも悪い役にされることが多いんだけど、この狼はどんな謎も解決するヒーローでみんなに尊敬されているんだ。だからこの本は何回も読んでいるんだ。」

リアムは、話しかけられて嬉しくなつてつい、盛り上がってしまいました。

「あつごめん。」

「ううん、いいのよ。この本とても好きなのね。この本屋さんいいところね。」

リリーは怖がることなく、話しました。

「君は僕が怖くないの？僕はいつも他の動物たちに怖がられてばかりで、友達も少ないんだ。」

「怖くないわ。こんなに本が好きで、穏やかなあなたがどうして怖がられるのかしら。」

リアムは初めて言われた言葉に顔を赤く染めました。

「ねえ、リアム。この森を案内してくれない？」

「うん！もちろん。」

どうやら、リアムに友達ができたようです。

「ついてきて。」

リアムとリリーは森を歩きはじめました。森には、学校や野菜畑、暗く奇妙な洞窟などがあり、たくさん場所を二人で回りました。

「おーい、ウサギのお嬢ちゃん。狼なんかと何してるんだよ。狼にろくなやつはいないぞ。狼に近づくな。」
遠くにいる狸が意地悪に話しかけてきました。

「大丈夫よ。心配ありがとう。」

と言ひ、狸の言ってきた事には気に留めず、

「気にしないで、私がいたくて一緒にいるんだからね。」

とリアムに言いました。

「うん。僕のせいでごめんね。」

「だから、気にしないで。次の場所に行こうよ。」

「うん。」

二人はまた歩き出しました。

「ここは、僕が一番好きな場所だよ。」

二人は、森の中で一番眺めが綺麗なお花畑に来ました。日が暮れて、星が辺り一面に広がっています。薔薇の匂い、少し冷たい風、全てが美しく感じます。

二人は横になりました。

「綺麗ね、とっても。連れてきてくれてありがとう。」

「どういたしまして。君に教えられてよかった。」

リリーの穏やかな笑顔にリアムはすっかり心を開いていました。

今日もまた、リアムとリリーは本屋で本を読んできました。すると、どこからか騒がしい声が聞こえてきました。

「おい、どうした。」

「畑が全部荒らされてるんだ。」

「どういうことだよ。」

「こつちもだ。」

「大切に育てたのに、誰がこんなことを。」

「犯人を見つけれ！」

この声が聞こえてきた二人は、様子を見に行きました。なんと、森の畑のほとんどが荒らされていたようです。

「おい！お前がやったのか、狼。」

「そうだ、お前がやったんじゃないのか。」

「いや、違うわ。リアムはそんなことしないわ。」

「僕じゃない。」

「本当かよつ。狼のくせに。」

「こんなことするの狼しかいないだろ！」

「僕じゃない。」

「でも狼だろ！」

そんな言葉にリアムは、

「僕じゃない。狼だからって何だよ。狼だからって何でそんなに決めつけられないといけないんだよっ！」

と言い返しました。

「リアム、落ち着いて。狼だからって犯人に決めつけられるのはおかしいわ。リアムに謝るべきよ。」

リリーはそう言いました。

「疑って悪かったな。」

「すまない。」

リアムのことを疑った動物たちは謝りました。

「許してあげてリアム。作物が荒らされてカツとなつてしまったのよ。」

「分かった。僕も言い返しちやつたから。ごめん。」

すると、リリーが言いました。

「ねえ、リアム。私たちが犯人を探さない？」

「えっ？」

「リアムが好きな本の探偵みたいに。リアムもヒーローになれるよ！」

リアムは少し悩みましたが、

「やってみたい！あの探偵みたいにみんなを救いたい。」

と言い、挑戦することになりました。二人はまず、畑を調べることにしました。すると、小さな足跡やかじられた葉っぱの痕跡を発見しました。

「これは、ネズミの足跡？」

「そうね。ネズミの足跡だわ。ネズミに会いに行きましよう。」

二人はネズミの元へ行きました。

「畑を荒らしたのはあなた？」

ネズミのマイクは言いました。

「違うよ。確かに畑には行ったけど、食べ物を探してただけで荒らしたのは僕じゃない。」

「本当に？でも足跡があつたのよ。」

「僕が畑に入った時には、もう畑が荒らされていたんだ。僕が畑に行く前に誰かが畑に行つたんだよ。」

「分かったわ。リアム、マイクが犯人じゃないみたい。」

「みたいだね。じゃあ、他の動物にも聞いてみよう。」

二人は、森の中で情報を集めるためにリリーのおばあさんのエリーの家に行くことにしました。

「ちょっと待って、大丈夫かな。狼って怖がられたりしないかな。」

「大丈夫よ。私のおばあちゃんは、見た目で中身を判断したりしないわ。」

「コンコンコン」

「おばあちゃん。リリーだよ。」

「どうぞ、お入り。」

そこには、リリーとよく似たウサギのおばあさんが立っていました。

「初めまして。リアムと申します。えっと、リリーさんとは友達で、よく一緒に本を読んだりしています。」

「はい、知ってますよ。」

「えっと、」

「リリーが楽しそうにあなたのことを話すものだから。」

「ちよっと、おばあちゃん。」

「はいはい。秘密だったわね。」

「でも、リリーがこの森に引っ越してきて、友達ができるか心配だったの。今は、心配なさそうね。」

「はい、僕の大切な友達です。」

「紅茶を淹れるわ。座って話しましょう。」

「ありがとうございます。」

「ありがとう。おばあちゃん。」

すると、リリーは言いました。

「早速なんだけど、最近夜に怪しい動物とか見てない？ 森の畑が荒らされて、その犯人を探しているの。」

エリーは言いました。

「うーん、何か見たような気がするわ。何だったかしらね。」

「思い出して、おばあちゃん。」

「えっと、あ、そうだわ。最近夜遅くに何か大きなものが畑の方へ行くのを見たわ。」

「何の動物が分かる？」

「暗くてよく見えなかったのよ。でも、かなり大きかったわ。」

「分かった。ありがとう。おばあちゃん。」

「役に立つといいんだけどね。そういえば、もう少し奥に進んだところにキツネのジェイクさんの家があるわ。彼なら、何か知ってるかもしれないわ。」

「僕、ジェイクさんの家知っています。唯一、僕のことを怖がらずに仲よくしてくれるんです。」

「え、本当？じゃあ、そこへ行かなくちゃ。」

「うん、行こう。」

二人が帰ろうとすると、

「リアムさんちよと話したいことがあって、二人で話せないかしら。」

とエリーが言いました。

「あつ、はい、分かりました。君は先に行っていてくれ。すぐに追いかけるよ。」

「そう、分かったわ。早く来てよ。リアム。」

「うん。」

リアムとエリーは再び椅子に座り、話し始めた。た。

「リアムさん、ありがとうね。」

「えっ、何がですか？」

「リリーと友達になってくれて。それで、リアムさんに伝えないといけないことがあるの。リリーが元気になったのは、リアムさんのおかげなの。リリーになにがあったのか、リアムさんにはきちんと話しておいた方がいいと思ってね。」

「はい。」

「あの子の父親ね、去年亡くなってしまったの。崖から落ちそうになったあの子を助けるために。」

「そう、なんですか。」

「だから、一時期すごく落ち込んでしまつて。今は元氣になったんだけど、あの時は本当に悲しんでいて、自分のせいだって毎日泣いていたわ。」

リアムは、何も言うことができず、黙って話を聞いていました。

「リアムさん、前にあの子の住んでいた森に行かなかった？」

「えっ。」

リアムは何のことだか分からずに困惑しました。

「あっ。」

リアムは、以前他の森に行ったことがあることを思い出しました。他の森はどんな感じか氣になって行ってみたことがあったのです。

「あります。リリーさんが住んでいたことは知らなかったのですが、他の森に行ったことがあります。」

「そう。じゃあやっぱりあなたなのね。あの子を励ましてくれたのは。」

「そういえば。」

リアムは思い出しました。森を散策していると、綺麗なお花畑がありました。綺麗な花を眺めていると、泣き声が聞こえてきたのです。辺りを見渡すと、小

さなウサギが体を丸めて泣いていたのです。リアムはそっと隣へ行くと、

「どうしたの、ウサギさん。悲しいことでもあったの？」と聞きました。ウサギは答えました。

「私のせいで、大事な人がいなくなっちゃったの。私をもっと周りに気をつけていれば、こんなことにはならなかった。」

リアムは言いました。

「そっか、辛いね。泣いていいんだよ。ウサギさんが大丈夫になるまで僕ここにいるからね。」

「うん。絶対だよ。」

数分すると、泣き疲れてしまったのか、ウサギは寝てしまいました。リアムはウサギを抱え、お花畑にあるベンチに寝かせました。帰らないといけなくなったリアムは、

「僕は隣の森に住んでるんだ。何かあったら僕を探して。辛いことはゆっくり乗り越えればいいよ。だから、大丈夫。」

と置き手紙を残して、帰りました。

「じゃあ、あの時泣いていたのは、」

「リリーだったのよ。リアムさんのおかげで、リリーは父親の死を乗り越えることができたのよ。」

「そうだったんですか。」

「元気になってから、リリーからリアムさんの話を聞いたの。リリーはリアムさんに会いたがっていたわ。それで一回この森に来たんだけど、この森は広くて、会えなかったのよ。リリーが絶対に会いたいって言うものだから、わざわざ引越してきたのよ。ちゃんと出会えたのね。」

「あ、あの、僕リリーの所に行かないと。教えていただきありがとうございます。」

「はい。いつてらっしゃい。」

リアムは家を飛び出しリリーを追いかけてきました。

キツネのジェイクの家に着くと、

「コンコンコン」

「すみませーん。ジェイクさん。」

と言いました。

「なんだい？」

ジェイクが家から出てきました。

「リリーと話そうと思って。」

「リリー？そりゃ誰だ。」

「えっ、リリー来てますよね。畑が荒らされた事について、ジェイクさんが何か知ってるかもってエリーさんが言うのでジェイクさんに話を聞こうと、」

「来てないぞ。」

「そんなはずはないです！リリーはさっきここに來たはずなんです。えっと、小さいウサギで、可愛い目をして、本当に良い子なんです。」

「そうか。でも、本当に来ていない。もしかして道に迷ったのか。リアム、だとしたら危ないぞ。そろそろ日が暮れる。」

リアムは顔を真っ青にしました。畑が荒らされてから、夜は危ないため家にいるように言われていました。「僕、探しに行く。探さなきゃ。」

「ちよっと待て、一人で大丈夫なのか？俺も行く。大事な子なんだろう。」

「ありがとうございます。」

二人はリリーを探し始めました。

「リリー！リリー！」

「リアム、二手に別れよう。」

「はい！」

しかし、いくら探してもリリーは見つかりません。

「いたか？」

「いえ、どこに行っただしょう。」

「リアム、少し休まないか？」

「でも、」

「もう一時間も探している。体力がなくなるぞ。」

「はあ、分かりました。少しだけ。」

リアムが地面に座るとジェイクが話し始めました。

「最近、怪しい影を見た。」

「えっ。」

「大きかったが、足音は重くなかった。おそらく、何かを踏まないように気をつけていたんだろう。」

「じゃあ、大きい動物が作物を狙っていた。」

「そういうことだろう。荒らした犯人は慎重に動いていたようだな。」

「もしかしたら、仲間がいるかもしれない。」

「仲間か、そういえば、猪の家族を最近よく見かける。しかも、良い噂は聞かない。」

「じゃあ、猪たちが。」

「そうだな。もしかすると、そいつらが犯人。あつ、この前、ルークさんと話した時に、最近小動物が連れ去られる事件が多いという話を聞いた。」

「じゃありりーもそいつらに連れ去られた。」

「その可能性はある。」

「そいつらの所に行かないと。」

「待て、普通に行っても意味はない。家族でつるんでいるんだ。そう簡単には行かない気がする。」

「じゃあどうすれば。あつ、こういうのはどう？」

「うーん。結構大変だぞ。それに時間もかかる。」

「今からやれば真夜中に間に合います。あいつらは必ず、また畑を荒らしますよ。」

「分かった。やろう。」

二人は猪を捕まえるために準備を始めました。

真夜中になると、猪たちが動き出しました。

「どこの畑にする？」

「ほとんど荒らしたからなあ。生き残ってる畑はあるか？」

「おい、お前ら！畑を見つけれ！」

「はい！探してきます！」

「早くしろよ。」

「はい！」

すると、一匹の猪が畑を見つけてきました。

「見つけました！」

「どこだ。どこにある？」

「森の奥にありました。どうりで見つけづらいわけです。」

「どのくらいの大きさだ？」

「結構でかいです。こないだの三倍はとれるかと。」

「よし。今日の獲物はそこだ。準備しろ、一時に出發だ！」

「はい！」

すると誰かが、

「ちよっと、畑を荒らすのはやめなさいよ。大切に育ててきた作物を荒らすなんてひどいわ。それに、私たちをこんなに縛ってなにがしたいのよ。」

と反抗しました。

「なんだと、ウサギの分際で偉そうだな。俺らはな、他の動物たちから猪だからって差別されてきたんだ。その腹いせだよ。」

すると、少し怒った様子で言いました。

「あなただけじゃないわ。みんなから怖がられて、差別されて、悲しい思いをしているのはあなただけじゃない。でも、あなたみたいに腹いせをしたりしない。私に優しく話しかけてくれたわ。ちゃんと傷ついているのに、それを表に出さないように何も感じないようにしているんだわ。腹いせをするのは違うから。」

「はあ。おい、奥に閉じ込めておけ！」

猪は出て行きました。

「行くぞ！出發だ！」

猪たちは静かに畑へ向かいました。

「わあ、大好物がいっぱいだ！」

「配置についたか？」

「はい！」

「やれ！」

猪たちが一気に畑を荒らし始めました。すると、

「うわあ。どうなってる!？」

どんどん猪たちが罾に引っ掛かっていきます。

「やめろ！罾だ！」

気づくのは遅く、ほとんどの猪が罾に引っ掛かってしまいました。すると、どこからか声がしました。

「大漁だ！たくさん引っ掛かってくれたね。」

「うまくいったな。」

これはリアムが仕掛けた罾でした。

「やったなあ、お前ら。」

「おい、罾をはずしてくれ。」

猪たちが抵抗します。

「やっぱりお前らか、畑を荒らしたのは。どうりでよく見かけると思ったんだ。」

ジェイクは言いました。すると、リアムが怖い顔をして言いました。

「おい、リリーはどこにいる？」

「えっ、リリー？誰だそいつ。」

「ウサギのリリーだよ。お前らだろ、リリーを連れ去ったのは。」

「ああ、あのウサギちゃんか。」

「言えーどこにいる。言わないとお前ら動けないぞ。」

「分かった。言えばいいんだろ。俺たちのアジトだよ。」

「どこにある？」

「あの道を真っすぐ行った先に大きな木がある。その根本が入り口だ。」

猪は言いました。

「ジェイクさん、僕行ってくる。見張りよろしく。」

「うん。行ってこい。」

「おい、ちょっと待て。言えば、罌を外してくれるって言ったぞ。」

リアムは無視して走り去って行きました。

「おいーそのキツネ。外してくれ。」

「誰も外してやるとは言っていない。そこで朝まで大人しくしとけ。」

「リリーー！リリーー！いるか？」

リアムの声が聞こえてきました。

「リアムー！こちー！」

「リリー、大丈夫か？怪我はない？」

「大丈夫よ。他の子達もいるわ。」

「多いな。」

リアムは連れ去られていた子達を助け出しました。

「リリー、探したよ。やっぱり一人で行かせるべきじゃなかった。ごめん。」

「謝らないで。リアムのせいじゃないわ。おばあちゃんが二人で話したいって言ったんだから。」

「うん。」

「聞いたの？」

「聞いたよ。ごめん、覚えてなくて。」

「もうっ、探したんだからね。ずっと、リアムのこと探してたの。」

「うん。」

「なのに、リアムは私のこと覚えてなくて、悲しかったんだからね。」

「ごめん。思い出したよ。ちゃんと。」

「よかったわ。そういえば、どうしてここが分かったの？」

「ちょっと猪たちを懲めただけさ。明日には、猪たちが犯人だって森中の動物たちが分かるよ。」

「そっか、リアムはこの森のヒーローだね。」

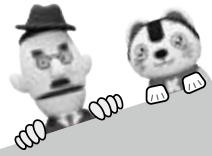
「そんなことないさ。ただ、リリーを助けたかったんだ。リリー、心配したよ。無事でよかった。君に何かあったらと思うと、」

「リアム。」

「うん？」

「ありがとう。私を見つけてくれて。リアムに出会えてよかったわ。」

【高校生の部】



【大賞】

桜の木と青い宝石

大分県立玖珠美山高等学校 2年

穴井 汐莉
あない せり

僕は子どものころ、自分の目が嫌いだった。

他の人とは違う、青色の目。町ですれ違う人はみんな黒色の目なのに、僕だけが違っていた。近所に住む同じくらいの子どもは僕をさけていたし、学校でも孤立していた。

しかし今では、唯一無二のこの目が好きだ。

きっかけは、小学生のときに体験した不思議な出来事だった。

春休み、ぼくはいつものように近所の公園のブランコで一人で遊んでいた。ブランコから少し離れた砂

場で近所の子どもたちが砂の山を作っている。耳をすましてみるとその子たちの会話が聞こえてきた。

「あの屋敷って何があるんだろうな。」

「きつとお宝だよ!」

「おばけがいたりして...」

「おばけだったらおれがつかまえてやる!」

どうやらあの屋敷に探検に行くらしい。

「あの屋敷」とは町の山の上にある大きな屋敷のことだ。まっしろな洋風の建物で、ぼくが生まれるずっと前からあるらしい。

「お宝」「おばけ」

彼らの言葉はぼくの好奇心をくすぐった。

「ぼくも一緒に行きたい。」

彼らにそう伝えられたらよかったが、嫌な顔をされて聞かなかったことにされるのがオチだ。

ぼくはブランコから降りて家にかけて足で帰った。

2日後、ぼくはリュックサックを背負ってあの屋敷

を目指した。昨日は近所の子たちと鉢合わせるのが嫌だったので屋敷までの地図を書いたりしながら探検のための準備をして過ごした。

ぼくの腰のあたりまでのびた草をかきわけながら山を登った。すれ違う木の中には今にも咲きそうなつばみをつけた桜の木があつて暖かい日の光をあびて喜んでいるように見えた。

どれくらい歩いただろうか。昨日書いた地図はあまり役に立たなかった。

「きつともう少しでたどりつける。」

そう自分に言いかけながら山を登った。

それからしばらくしてずっと続いていた木が途切れるのが見えた。

自然と歩くスピードが速くなる。

森を抜けると少し開けた場所に出た。

そこにあつたのは大きな建物だった。まっしろな壁が太陽の光を反射して少しまぶしい。

たくさんをつばみをつけた大きな桜の木と青々とした芝生が生えている庭を洋風の柵が大きく取り囲んでいた。

あの屋敷だ。町から見るときよりずっと大きく見える。

ぼくはおそろおそろ屋敷の庭に入った。

ぼくは屋敷に近づいた。

天気が良いからだろうか。おばけがいるように思えない。

一度屋敷の玄関まで進んだが、万が一、人がいたらと思ったので、とりあえず屋敷のまわりを見てまわることにした。

ぼくの目にとまったのは大きな桜の木だった。うすいピンク色のつばみが風にゆれていた。

ぼくは桜の木に近づいた。

「そこで何をしているの？」

突然、どこからか声がした。声の主を探してあた

りを見まわす。

屋敷の一階の窓から女の子が顔を出していた。不思議そうにぼくを見ている。風にふかれて女の子の長い黒髪がなびいていた。

ぼくはおどろいて声が出せなかった。誰もいないと思っていたのに。

「あなたは誰なの？」

女の子が再び問う。

「ご、ごめんなさい……!!」

やっと声が出せた。

勝手に入ったことを怒られるかもしれない。

ぼくは走って逃げようとした。

「まってー!」

ぼくは足を止めた。女の子の方を見ると手招きをしている。

ぼくは引きよせられるように彼女の方に歩いていった。

彼女と向かい合う。黒い髪にまっしろな肌。

すいこまれそうな黒い瞳はぼくのことをじっと見つめていた。

「勝手に入ってごめんなさい。」

ぼくは彼女に謝罪をした。

すると彼女はくすくすと笑った。

「そんなこと怒ってないよ。窓の外を見たら人がいたから少し驚いただけよ。怖がらせちゃったのなら謝るわ。」

ぼくと同じくらいの年の見た目なのに、言葉使いが大人っぽい。

「私はさくら。あなたは？」

「……まこと。」

彼女の顔がぱあつと明るくなった。年が近い子とちゃんと話すのは久しぶりで少し緊張する。

彼女は突然、窓から身をのり出してぐつとぼくに近づいて言った。

「まことの目って変わった色をしているのね。」

どきっとした。ああ、またこれか。目の色のことを言われるとどうしても胸のあたりがざわざわとして気持ちが悪い。ぼくは彼女から目をそらした。

「嫌いなんだ、この目。」

彼女は目を丸くして言った。

「どうして!? 宝石みたいで綺麗じゃない!」

そう言っただけで彼女は部屋にひっこんだ。しかしすぐに何かを手にとって戻ってきた。

「フランスのお人形さんみたいよ!」

彼女が見せてくれたのはたくさんフリルがついたドレスを着た金髪の女の子の人形だった。

「私は好きよ。」

彼女はにっこりとほえんだ。

体が熱くなるのを感じた。こんなことを言われたのは初めてだった。ぼくの目が好きだなんて。綺麗だなんて。

彼女の笑顔が眩しかった。

「ありがとう。」

その時に言えた精一杯のお礼だった。

それからぼくは彼女とたくさん話した。学校の事や家族の事、春体みになって何をしたか…。

彼女は学校を知らないようで、学校のことを話すととても嬉しそうだった。

ぼくも初めて友達が出来たみたいでうれしかった。

「そろそろ帰らないと。」

気がつくとい日は傾き始めていた。来た時の道を考えるともう帰り始めた方がいい。

彼女は少し悲しそうな顔をした。

「明日も遊ぼうよ。次はぼくの家にこない?」

すると彼女はぼつりと言った。

「ごめんなさい。まことの家には行けない。」

「どうして？」

「私……体が弱くて、お父さんから屋敷の外には出なうて言われているの。」

そうか。だから学校のことを知らなかったのか。

「また明日もここにくるよ。」

ぼくは彼女を安心させるように言った。

それを聞いた彼女は驚いたような顔をした。

「明日もここに来てくれるの？」

「うん、来るよ」

「約束して。絶対よ？」

彼女は小指を差し出してきた。ぼくは小指を絡める。

「また明日ね、さくらちゃん。」

彼女は嬉しそうに、でもどこか寂しそうな顔をしてみなうた。

ぼくは彼女と指切りをして屋敷を後にした。

次の日。

ぼくは早起きをして屋敷に向かった。山に登りながら咲いていた花を摘んで花束を作った。

屋敷に着いた時、昨日と少し違うように感じた。

昨日と天気は変わらずよく晴れた暖かい日だったのだが、それとは反対に屋敷はどんよりとした暗い雰囲気包まれていた。まるで誰もいないかのように思えた。

ぼくは、昨日彼女と話した窓の所へ向かった。

ぼとり、と花束を落とした。

窓は開いていた。しかし、彼女はいなかった。人の気配すらなかった。

部屋の中は人が住めるような状態ではなかった。

枯葉や木の枝やゴミが散乱していた。

あのフランス人形もどこにもなかった。

屋敷の周りを何度も何度も見て回ったが誰もいない。

昨日、さくらちゃんは確かにここにいたのに。

彼女の存在が丸ごと消えてしまったみたいだった。

あれはぼくの妄想だったのだろうか。

あんなにたくさん話して、「また明日」って約束もしたのに。

ここには彼女も、フランス人形も、なにもなかった。

彼女の存在を証明するものといえはぼくの目だけだ。

大嫌いだったぼくの目を綺麗だと言ってくれた初めての友達。

ざあつと音がして白い何かがぼくの頬をくすぐった。

振り返るとそこには満開の桜の木があった。

昨日はつばみしかなかったはずなのに。

ぼくの目にうつる桜の木は嬉しそうに揺れていた。

【佳作】

自分のたのしみ、他人のしあわせ

徳島県立脇町高等学校 2年

まつうら
松浦 奈央

男の子は色を見たことがなかった。

男の子の部屋からは花壇に咲く小さな花たちと誰も住んでいない隣家の部屋の窓が見え、そこから外を眺めることが日課だった。

男の子は退屈だった。誰も自分の見ている世界を理解してくれないから。誰かと関わることを嫌がったのだ。

そんなある日、静かだった隣家のにぎやかになった。男の子が両親に尋ねると、自分と同年代の子供がいる家族が引っ越してきたのだと教えてくれた。

「仲良くしてみたらどう？」

仲良く、か。お母さんに言われた言葉を心の中で反復する。

「仲良くしようとしたところで……」

何日か経ち、男の子はいつも通り窓の外を眺めていた。何故かはわからないが、いつもより気分が良かったので、鼻歌なんて歌いながら。

「誰がいるの？」

男の子はびくくりして声のする方を見ると、一人の女の子が窓からこつちを見ていた。その子は鈴のようになく、高い声で「綺麗な声だね」と言って微笑んだ。

男の子は何も言えなかった。

色なんて無くても分かるくらい女の子の可愛らしさに、透き通るような声の響きに、何も言いたくなかった。

話したい。仲良くなりたい。

そんな想いとは裏腹に頭に浮かぶのは自分の眼の

こと。この子はボクを分かってくれるかな。皆みたい
に気味悪がったりしないかな。男の子は怖かった。そ
れでも勇気を出して一言「ありがとう」とだけ言う
と、女の子はぱっと顔を明るくさせて男の子に尋ね
た。

「ねえ、この窓からは何が見えるの？」

「え……？」

「私ね、生まれつき目が見えないの。だから教えてく
れないかな、この窓からは何が見えてどんな世界が
広がっているのか。」

男の子はまた何も言えなくなった。

何があるのかを伝えることならボクにもできる。
でも、ボクの見ている世界には表情なんてなくて、広
がるのはただ静寂だけ。

ああ神様、どうしてあなたはこんなにも酷なこと
をするのですか。

心の中で幾度となく唱えた言葉だが、今回はあま

りにも重い。ボクの一言でこの子を悲しませるのは
嫌だ。でもボクは目の前に咲いている小さな花が何
色なのかすら知らないのだ。

いや、それでもいいじゃないか。ボクは、ボクと彼女
だけの世界を創ろう。

それからというもの、男の子と女の子は毎日窓を
介して話をした。その度に男の子は女の子に色とり
どりの風景を紹介した。

ある日は「緑色の猫が茶色の花を持ってきたよ！」
と言い、またある日は「木が黒く染まってきたよ、も
うすぐ夏だね」と言った。男の子は幸せだった。彼女
もきつと幸せだったと思う。これからもこんな日常が
続けばいいのに。心の底からそう願った。

女の子は光を見たことがなかった。

女の子の日常は毎日が騒々しくて、常に不安と一
緒だった。

女の子は静かな場所に行きたかった。誰にも迷惑

をかけずに生きられるような、そんな場所に。

そんな女の子の気持ちにくみ取って、女の子の父親が引越すことを提案した。話を聞くと、隣の家には自分と同年代の子供がいるらしい。

「そこでゆっくり休もう。きっとその子とも仲良くなれるさ。」

仲良く、か。私と関わるなんて面倒なことなのに、いいのかな。女の子は心の中でそうつぶやいた。

数週間が経ち、新しい家に引越してきた女の子は、父親に自分の部屋の窓を開けてもらった。すると、柔らかな風と一緒に誰かの鼻歌が聴こえてきた。

女の子は驚いた。その歌声の心地よさに。今まで聞いてきた人たちの声は女の子にとって、大切なシャボン玉をこわす強い風だったから。気付いたときには、その鼻歌が聴こえる方へ向いて「誰かいるの?」なんて尋ねてしまっていた。

少しの沈黙が流れ、もう一度話しかける。今度は

しっかりと考えてから。その言葉に対してもすぐには言葉が返ってこない。

ああ、やっぱりダメなのかな。私なんか誰かと仲良くなろうとするなんて。

あまりにも返ってこない返事にそう肩を落としていると、小さな声が聞こえた。女の子は驚きと同時に深く喜んだ。

この人と仲良くなりたい。もっと話してみたい。そう思って女の子は男の子に「窓の外の景色が知りた」と初めて自分の眼のことを人に伝えた。きっと驚かせてしまったのだろう。また沈黙が流れる。断られるかもしれない。気を遣わせてしまうかもしれない。でも、返ってきたのは意外にも肯定の言葉だった。

それからというものの、男の子は女の子に様々な話をした。女の子もそれが毎日の楽しみになっていた。

男の子と女の子が出会ってから一年と二か月が過ぎたある日。女の子はどうしても男の子とどこか遠

くへ出かけたくなって、お母さんに相談した。

「ピンクの空が一番綺麗に見えるのはどこの？」

「ピンクの空？」

「うん。隣の家の男の子が言ってたの。今日も快晴で、ピンク色の空が輝いているよって。」

これを聞いた女の子のお母さんは、女の子が男の子にからかわれているのだと思い、「空はピンク色なんかじゃなく、青色よ。」と言ってしまった。女の子は驚いて、しばらく何も言えなかった。

男の子が私に嘘をついていたことも、それに何も気づかず受け入れていた自分も。すべて許せなかったのだ。

その日から女の子が窓から顔を出すことはなかった。ずっと閉ざされ、カーテンの閉めきられたその窓を見た男の子はどうして急に女の子が自分と話をしてくれなくなったのかもわからないまま再び心まで閉ざしていった。

男の子は色を見たことがなかった。

男の子は視界からだけでなく鮮やかだったはずの心からも色を奪われてしまった。

女の子は光を見たことがなかった。

女の子は視界からだけでなく自分の心からも光を奪われてしまった。

男の子と女の子は支え合っていた。お互いがお互いの色であり、光だったのだ。

数十年後……その男性は結婚していた。色を教えてくれる女性と。男性は数十年前に出会った女の子に嘘をついたことを後悔していた。

数十年後……その女性には家族ができていた。光のありかを教えてくれる道標のような家族が。女性は、数十年前に出会った男の子にずっと謝りたいと思っていた。男の子の嘘が、自分を悲しませないためだったことに気づいたから。

広い宇宙の狭く小さな町で二人は違う時を経て、

想い合いながら暮らしている。
いつかまた、出会えると信じて。

【選考委員特別賞】

わがままな王と幸せの花

私立福山暁の星女子高等学校 一年

佐々木 咲和

昔々、とある小さな国にバロン王という王様がいました。バロン王は、自分の思い通りにならないことが大嫌いで、欲しいものはすぐ手に入れる。気に入らないことがあればすぐ怒るという、わがままな性格が有名でした。

ある日、王は退屈を感じて

「この世で一番美しい物を手に入れたい。」

と、言い出しました。家臣たちはこの世で一番美しい物が分からず、

「一番美しいものとは何でしょうか？」

と、聞きます。王は、適当に

「そうだなあ。花とか。」

と、言いました。家臣は国中を探しましたがどの花も王を満足させるものではありませんでした。豪華なバラ、珍しいランどれを見ても王は首を横に振るばかりでした。

「これではダメだ！」

と、怒った王は、自ら花を探しに行くことにしました。そして森の奥に住むという魔法使いの噂を聞きつけます。

「その者なら、私にふさわしい花を持っているかもしれない。」

王は家臣たちを連れて、魔法使いの小屋を訪れました。そこには年老いた魔法使いが住んでおり、庭に咲く花々が風に揺れています。

「魔法使いよ。私にこの世で一番美しい花をよこせ。」

と、王が言うと、魔法使いはにこりと笑いこう言いました。

「それは『幸せの花』のことでしょうか？もしその花のことならば、簡単に手にできるものではないですよ。あなた自身が育てなければ、その美しさを知ることにはできないのです。」

魔法使いの言葉を聞き、王は眉をひそめました。

「私は王だぞ！なぜ私がそんな手間をかけなければならないのだ！」

と、王が言うと、

「それがこの花の秘密です。」

と、魔法使いは答えます。つづけて、

「わがままな心では咲かせることができません。思いやりと誠実さをもって育てなければこの花を咲かせんよ。」

と、言いました。王は少し迷いましたが、

「そのくらい簡単だ！」

と、言って魔法使いから種を受け取りました。城に戻ると、さっそく庭師たちに命じます。

「これを咲かせろ！」

と。しかし庭師たちがどれだけ水や肥料を与えても、芽すら出ませんでした。

「どうなっている。」

と、怒った王に庭師は恐る言いました。

「これは王自身が育てなければならぬものだそうです。」

と。王は、しぶしぶ自分で育てることにしましたが、すぐに飽きてしまいました。水やりを忘れ、雑草を抜かず、種を放置する日が続きます。当然、そんな育て方では芽は出ませんでした。

そんなある日、町の農夫が城を訪ねてきました。

「王様、花を育てるには土を愛し、時間をかけることが必要です。」

と、農夫は言いました。

「土を愛する？」

王は呆れましたが、農夫が丁寧に教える様子に少し興味を抱き、実践してみることにしました。王は自分の手で土を掘り、水を与え、雑草を抜くようになりました。それでも花はなかなか咲きません。そんな中、通りかかった子どもが声をかけてきました。「王様、もっとやさしく話しかけてあげるといいよ。花はやさしい言葉が好きなんだ。」

王は、はじめて笑顔を見せ、花に話しかけ始めました。

「大きく育ってほしいんだ。咲いてくれたら私はすごく幸せな気持ちになる。」

王は、花を育てる日々を重ねるうちに、次第と周囲の人々と交流をするようになりました。農夫や子どもたち、さらには町の人々とも話をし、花の育て方を聞いたり、一緒に手伝ってもらったりしました。王は少しずつ他人を頼ることの大切さを学んでいきました。

そしてある朝、王が庭を訪れると、一輪の美しい花が咲いていました。その花は虹色に輝き、柔らかな香りを放っていました。まるでこの世のものではないかのような美しさです。王は、その花の美しさにとても感動しましたがそれ以上に、花を育てる過程で得た人々との絆が心を温かくしました。王は、

「この花は、私一人のものではない。」

と、なみだを流しながらつぶやきつづけて、

「農夫、子どもたち、町みんなのおかげで咲かせることができた。本当にありがとう。」

と、初めて感謝の言葉を口にしました。王はその花を城の庭に植え直し、国中の人々に見せるようにしました。人々はその美しさに驚き王の変化に心から喜びました。

バロン王は、その日からわがままな性格をあらため、人々と協力して国を治めるようになりました。幸せ

の花は、それからもっと大きく育ち種を落とし、町中に広がり、見る者に喜びを与え続けました。

「幸せの花は、誰もが心に育てられることができるものだ。」

と、王は語りかけ、人々はその言葉に深くうなずきました。

こうして、誰の言うこともきかない自己中心でわがままだった王は、人々の意見を聞きつねに町の人を思いやることのできる心やさしい王となり、国は幸せと絆で満ちるようになりましたとき。

【久留島武彦記念館館長特別賞】

私を認めてくれる一人のへび

大分県立玖珠美山高等学校 2年

馬越 うまこし 友梨 ゆり

田舎の山の中にある小学校に、小学2年生の女の子、「ナナ」がいました。ナナは、気が弱く、自分のことが大嫌いでした。ナナがそういう性格になったのは、今年の春に起きた出来事がきっかけでした。学校に登校すると、今まで普通に話していた友達にさけられるようになりました。それは、日に日にひどくなり、ナナの教科書を破られ、机には暴言をかかれ、その時ナナはいじめだということに気づきました。ナナはいじめている子に、

「何でこんなことするの？ 私何かした？」

すると、その子は

「あんたにあきた。うざい。嫌い。」

と言われました。その瞬間ナナは、自分には魅力がない、自分のことを好きな人はいないと思い、そこからそんな自分が嫌で、自分のことが大嫌いになりました。

ある日、担任の先生から注告を受けました。

「一昨日から、屋上にへびがたくさんいてとても危険です。もし屋上に行ったら、死んでしまうかもしれません。だから、絶対に屋上に行っちゃダメだよ。」

クラスみんなは、

「へびきもち悪いねー。嫌だねー。」

とあちらこちらからへびを悪く言っている声がとびかかっていました。でも、ナナだけは達いました。ナナは、クラスの中で唯一へび好きの子だったのです。誰一人私を必要としてくれない、へびにだったら殺されてもいいと思っているナナは、好奇心を持ってクラスから逃げ出すように、屋上に向かいました。

屋上に着くと、ナナは辺を見渡しました。でも、へ

ヒはどこにもいませんでした。落ち込んでいる反面、少し安心してゐるナナもいました。するとそこに、一匹のヘビ「ヘビ郎」が現れました。ナナは、びっくりしたが元氣のないヘビを見て、勇気を持って話しかけてみたのです。

「こんにちは。お名前は何？」

ヘビ郎は、人間のように普通に話しかけてくるナナにびっくりしました。

「僕にびっくりしないの？僕の事怖いって気持ち悪いって思わないの？」

ナナは、かぶせるように答えました。

「思わないよ。私、ヘビ大好きだよ。」

ずっと人間に嫌われつづけた、ヘビ郎はその言葉を聞いて、とてもうれしくなりました。ナナは、ヘビ郎の落ち込んでいる様子が氣になってこう言いました。

「なんだか、元氣がなさそうっていうか、落ち込んでいるようにみえるんだけど何かあった？」

ヘビ郎は、

「家族とはぐれちゃったんだ。僕一人で人間の世界にいつづけるのは苦しいよ。ナナみたいな人間がいっぱいいればいいのになー。」

と言いました。

「私もね、みんなに嫌われてるんだよね。私にあきちゃったんだって。うざいんだって。」

ナナは、ヘビ郎に心配かけないようにずっと笑顔でした。そんなナナをみて、ヘビ郎は

「つらかったら、泣いていいんだよ。嫌なら嫌っていいんだよ。僕はね、ずっと人間全員に嫌われてるって思ってた。けど、ナナと出会えて、一人でも僕を好きだと思ってくれる人がいるんだって思うと、生きていいって思えて心強いんだよ。」

ナナは、その言葉をきいて涙があふれてきました。

「ヘビ郎ありがとう。ヘビ郎は、一人でも僕を好きだ

と思ってくれる人がいるならいいと言ってるけど、その一人になってくれる？」

へび郎は、すぐ言いました。

「もちろんだよ。ていうか、もうなってるよ。」

その言葉を聞いて、ナナは自分に自信が付きました。

次の日、へび郎に会いに屋上へ行くとたくさんへのびがナナに近づいてきて、

「へび郎の母です。ナナちゃんのこと聞きました。仲よくしてくれてありがとうございます。」

へび郎は目に涙をためながら、

「ナナ。ありがとう。ナナに出会えて本当によかった。」

ナナは、

「へび郎。待ってよ。昨日出会ったばかりじゃん。まだ、ここに居てよ。」

ナナは、唯一できた友達と離れることにショックを受け、泣きわめいてしまいました。

へび郎は、

「ごめんね。もう行かなくちゃ。でも一つだけ言わせて。ナナなら大丈夫。離れているけど、僕はずっとナナの味方で、ナナが一番の友達だよ。ナナ、僕が言った言葉覚えてる？」

ナナは、

「うん。覚えてるよ。一人でも自分の事を好きだと思ってくれる人がいるならそれでいい。」

へび郎は、真険な顔で、

「そうだよ。ナナには離れていても僕がいる。だから、自分の言葉でいじめっ子達とたたかうんだ。何も恐れなくていい。僕がいるから。」

そう言って、へび郎は帰っていききました。へび郎が言ってくれた言葉を胸に、ナナはクラスに戻りました。

教室に戻ると、いつも通り机に暴言が書かれました。その時、へび郎の言葉を思い出し、ナナは言いました。

「やめてよ。黙ってる人、見て見ぬふりしてる人、私を助けてよ。」

【読売新聞社賞】

にんじんを求めて

大分県立玖珠美山高等学校 2年

いじわら しゅうま
藤原 鷲馬

冬の森は、白い雪でおおわれ静寂に包まれていた。枯れ木の間を冷たい風が吹き抜け、かすかに雪を舞い上げる。どこまでも続く雪原の中に、小さなウサギの親子がいた。

母ウサギと子ウサギは朝から食べ物を探していた。雪が積もると、食べ物を見つけるのは難しい。しかし母ウサギは知っていた。森の奥、古い切り株の近くに埋もれたニンジンの畑があることを。

「お母さん、寒いよ。」

子ウサギが震えながら母ウサギの後について行く。母ウサギは優しく微笑み、ふわふわの体でそつと子

ウサギを包み込んだ。

「もう少しだからね。もう少しだからね。」

と何度も繰り返す。やがて切り株の近くにたどり着くと、母ウサギは前足を使つて雪を掘り始めた。子ウサギも一緒になって掘り進めると固い土の中から色鮮やかなニンジンが顔を出した。

「やった。」

親子は口を揃えて言った。子ウサギは嬉しさのあまり飛び跳ねる。その無邪気な姿を見て母ウサギは安堵のため息をついた。しかし、その時だった。

「バキッ。」

少し離れた場所で枝が折れる音がした。母ウサギが耳をピンと立て、目が鋭くなる。

「リオ後ろに下がっていなさい。」

母ウサギの声が低くなった。子ウサギのリオは、母の様子にただならぬ気配を感じ、慌てて足を止めた。ザク、ザクとしだいに雪を踏みしめる音が近づいてく

る。やがて木々の隙間から現れたのは大きな黒い影。
「狼だ。」

リオは喉が凍りつくような恐怖を感じた。狼はゆつくりと近づいてきた。鋭い牙を覗かせ、冷たい目でウサギたちを見下ろしている。

「寒い冬だな。お前たち食料が欲しいだろう？」

狼は嘲笑するように言った。

「なら、私たちを見逃してくれはしないかい？」

母ウサギは静かに言った。

「はは、おもしろいことを言うな。俺も食料が欲しいのさ。お前たちはちようどいいごちそうだ。」

次の瞬間、狼が飛びかかってきた。

「リオ、逃げなさい」

母ウサギはリオを突き飛ばし、狼に立ち向かった。小さな体で必死に牙をかわし、鋭い爪を避ける。しかし、相手は巨大な肉食獣。母ウサギはしだいに鈍くなっていた。

「やめてー母さん！」

リオは必死に叫ぶ。しかし、リオの叫びも虚しく、狼の牙が母ウサギの体に食い込んだ。

「う、うう」

母ウサギは苦しげに顔を歪め、よろめいた。

「お母さん！」

リオは駆け寄ろうとした。だが、母ウサギは最後の力を振り絞り、リオを睨みつけた。

「逃げなさい！」

その目は、悲しみと愛情に満ちていた。リオの足が震えた。しかし、母の言葉が胸に突き刺さる。リオは涙をこらえ、必死に走り出した。後ろで、母のかすれた声が聞こえた気がした。

「愛してるよ。」

それが母の最後の言葉だった。それから、リオは森の奥へと逃げ続けた。雪の冷たさが足に染みる。でも、それ以上に心が痛かった。

「お母さん。」

リオは泣きながら雪に溶け込むように座り込んだ。空には、灰色の雲が広がっていた。寒くて、寂しくて、怖くて、もう動けない気がした。だけど。

「こんなところで終わりになんかしない。」

リオは唇を噛みしめた。お母さんは、最後まで自分を守ってくれた。ならば、自分も生きなければならぬ。どんな辛くても、生き抜いてやる。そう誓って、リオはゆっくりと立ち上がった。風が吹いた。リオの涙が雪と一緒に凍りついていく。母の愛と悔しさと悲しみを胸に、リオは寒い世界を生き抜くことを決めた。

そして、時は流れてリオは成長していた。かつての小さな体は、しなやかで力強くなり鋭い目つきは森のどんな危険も見逃さない。

「もう昔のようにはいかない。」

リオは森の中を駆けた。足音を殺しながら、音も

なく木々の間をすり抜ける。その動きは、かつての母よりも素早く、研ぎ澄まされていた。そしてリオはついに見つけた。あの狼を。あの日と同じ鋭い牙を持つ恐ろしい狼。しかし、リオの目にはもはや恐怖はなかった。

「お前は。」

狼が目を細めた。リオは静かに、しかしはっきりとした声で言った。

「俺はリオ。お前が殺した母の子だ。」

雪が舞い散る中リオは低く身構えた。もう、逃げることはしない。今度は自分がこの世界を生き抜くために戦う。冷たい風が吹き抜ける森の中でリオの心の中は燃えるように熱くなった。

「やめよう。」

リオがつぶやく。ここで自分が戦い勝っても母は帰ってこない。無駄な血は流したくない。リオは心も大人になっていた。

「へえ、面白いウサギだ。」

狼が母を嘲笑った時と同じ声で言った。それでもリオは戦いをしなかった。その凛々しくたくましい姿に狼は腰を引き、

「ふん。」

と一言残し森へ帰っていった。リオはその足でニンジン畑へと足を運んだ。

「母さん。」

リオは持ち帰ったシンジンを二つに折ると母のお墓へとお供えした。涙が込み上げてくる。耐えられずリオは泣いた。しかし声は出さず静かに泣いた。リオは立ち上がった。もつともつと強くならないと。そう思い森へとかけて行くのだった。

第7回久留島武彦童話賞

《第一次選考委員》

久留島武彦記念館 事務局長 白木寛章
久留島武彦記念館 副館長 柳井田博隆

《最終選考委員》

絵 本 作 家 いしいつとむ
有限会社 花書院 絵本専門士 柴田香
絵 本 セラピスト 武岡寿美
玖珠町教育委員会 教育長 梶原敏明
久留島武彦記念館 館長 金成妍

第8回久留島武彦童話賞

子ども創作童話コンクール募集要項

募集内容 創作童話 オリジナル作品

募集対象 小学生から高校生(18歳未満)

(ただし、締切日においての学年)

受付期間 令和7年9月1日(月)

令和8年1月31日(土)

発表 令和8年6月19日(金)

記念館ホームページ上で公表

表彰式 令和8年6月下旬

久留島武彦記念館

入賞 小学生、中学生、高校生の部

・大賞(各1編)・佳作(各2編)

・選考委員特別賞・久留島武彦

記念館館長特別賞(該当の場合のみ)

・読売新聞社賞

その他 ・入選作品の著作権は、久留島武彦記念館に帰属される。

・応募原稿用紙は返却しません。

応募方法

・入選作品は学校名、氏名、学年を表示して作品集にします。また、ホームページやその他のメディアで発表します。

・小学生の部 400字詰め

原稿用紙3枚以上10枚以内

・中学生の部 400字詰め

原稿用紙5枚以上30枚以内

・高校生の部 400字詰め

原稿用紙5枚以上30枚以内

① 作品は、手書きによること。

② 原稿用紙の右側をホッチキスなどで固定してから提出してください。

③ 表紙にはタイトルと名前、学校、学年（年齢）、枚数を記入し、作品にはページ番号を記入してください。

応募先 〒879-4404 大分県玖珠郡

玖珠町大字森855番地

久留島武彦記念館

TEL0973-73-9200

第7回 久留島武彦童話賞

子ども創作童話コンクール

受賞作品集

二〇二五年六月二十七日 発行

編集 久留島武彦記念館

〒八七九―四四〇四

大分県玖珠郡玖珠町大字森八五五番地

電話 〇九七三―七三―九二〇〇

FAX 〇九七三―七三―九二〇一

発行 いづみ印刷 株式会社

〒八七〇―一一一七

大分県大分市高江西一丁目四三二二―二五

※本書の無断転載・複製を禁じます。

※作品集の編纂にあたり、応募作品の、①誤字・脱字、②ひらがなを漢字へ変換、③不適切な言い回し等は適宜、修正させていただきました。

くるしま童話名作選

『くるしま童話名作選』は、久留島先生の没後50年を記念して大分県玖珠町「久留島武彦」顕彰記念事業実行委員会より2010年度から企画出版され、くるしま童話を現代によりみがえらせ、多くの子どもたちに届け続けています。

現代の子どもたちが楽しめるように言葉や見開き、読み聞かせた時の耳から聞こえる語感にこだわり、画家も日本の絵本画家を代表する方をお願いして作画していただきました。



『ともがき』

作 久留島 武彦
絵 古内 ヨシ



『子どもいのり』

作 久留島 武彦
絵 古内 ヨシ



『ゆめうりふくろう』

作 久留島 武彦
絵 遠山 繁年



『トラの子ウちゃん』

作 久留島 武彦
絵 篠崎 三朗



『すずむし』

作 久留島 武彦
絵 黒井 健



『ツバメのおんがえし』

作 久留島 武彦
絵 篠崎 三朗



『月宮殿のおつかい』

作 久留島 武彦
絵 アヤ井 アキコ



『海に光るつぼ』

作 久留島 武彦
絵 ゴトウノリユキ



『弾きがえる』

作 久留島 武彦
絵 市居 みか



『なだれうさぎ』

作 久留島 武彦
絵 いしいつとむ

『くるしま童話名作選』は、久留島武彦記念館および全国の書店で購入することができます。

※店頭がない場合は、注文の上ご購入下さい。

各作品 定価：1,300 円＋税

第8回

久留島武彦童話賞

～子ども創作童話コンクール～ 作品募集

募 集 内 容

創作童話
※オリジナル作品

募 集 対 象

小学生から高校生
(18歳未満)まで

受 付 期 間

令和7年9月1日(月)～
令和8年1月31日(土) 必着

たくさん応募
してね!



主 催 玖珠町 / 玖珠町教育委員会 / 久留島武彦記念館

後 援 読売新聞社

協 賛 花林 & 手づくり夢工房

社会福祉法人 暁雲福祉会「森のクレヨン」

株式会社 ジャクエツ

有限会社 花書院